
仮面ライダーディケイド～流星のロックマンの世界～

ギャツビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイドと流星のロックマンの世界

【Nコード】

N7295L

【作者名】

ギャツビー

【あらすじ】

ライダー対戦を終えたディケイドと門矢士は、仲間と共に、旅を続けていた。今回来た世界でなんと士の前に紅渡が現れ、この世界にいないはずの怪人たちが紛れ込んだ。と、言った。そして、何も関係のないはずのこの世界を救って欲しいと、士に頼んできた。・・・！！

ゝプロローグゝ（前書き）

あらすじは、ロックマン側かディケイド側にするか迷いました・・・

・
メインは流星のロックマンEXEビーストトライブなので、こちらは、あまり、早く更新できないと思いますが、気長に待ってください
らありがたいです。

くプロローグく

ガラガラガラ……

写真館の壁紙の絵柄が変わる。これで何回目だろうか？ライダー対戦が終わってから相変わらず俺は旅を続けている……。デイケイドの物語を造るために。

最近の世界を回っていても戦うことはなくなった。どの世界も平和を取り戻しているのだ。だが今回の世界はそうは行かないような気がする……。俺の感がそう言っただ。また新たな戦いがこの世界で起きるような……。そんなことを考えながら俺はこの壁紙を見ていた。

その壁紙の絵柄は、どこかの展望台で少年が、夜空を見上げている風景だった。だが、普通の夜空ではない。その夜空には空中に透明の道が、いくつも見えているからだ。少なくともこれは、この世界特有のものなのだろう……。

少年は、夜空を見上げていた。壁紙に描かれていた少年だ……。頭に緑色のレンズがあるサングラスをかけている。

今日は、普段より長く夜空を見上げていた。なぜだろう？なぜか普段より星が歪んで見えるな・・・その少年はそんなことを思っていた。なぜか星がこの世界に異物が入ってきた、と警告しているように少年には見えた。

そんなわけないか・・・少年は、結局、自分が感じた違和感を解決することが出来ずに、その場所、近所の展望台を後にした。

第1話「次の世界は・・・？」

「今度は何の世界だろうな？」

どこかの写真館で青年が壁にかけられている壁紙を見ながら言う。
彼の名前は小野寺ユウスケ、世界の破壊者と世界から拒絶され続けていたディケイドと、旅を共にする仲間である。

「さあな？」

隣にいた青年がそっけなく答える。彼が仮面ライダーディケイドこと、門矢士である。だが彼の破壊者としての使命は終わり、今は気ままに様々な世界を旅している。

「とにかく外に出てみるか！」

そう言つて士は、写真館の外へ出て行つた。

「士君！」

それを追いかけるように外に出た女性の名は光夏海。彼女も旅の仲間である。

士が写真館の外に出た瞬間、士の服装ががらりと変わる。何かの隊員服のようなものだ。士の服装が急に変わる・・・それは以前士が世界を救うための旅をしていたときに、よくみられていた光景だが、その使命が終わり、門矢士として旅を始めてからは、一度もなかった。

「士！？その格好は・・・？」

ユウスケが驚いた表情をしながら聞く。

「まったく・・・俺は本当に何着ても似合っちまうな・・・」

そういつも通りに振舞う士だったが、姿が変わってしまったことに
関していやな予感がしていた。

（なぜ、俺の服装が変わった？今までこんなことはなかったはずが・
・・・この世界に何かあるのか？）

「とりあえずこの世界のことでも調べてくるか！」

そう言って士は歩き出した。その瞬間・・・。

「キャアアアア！！？」

どこからか聞こえる悲鳴・・・。

「士っ！」

ユウスケが士の名前を呼ぶ。

「分かってる！！」

士達は急いで悲鳴が聞こえた場所へと向かった。そこで見た光景は、
オルフェノクやワームが人間を襲っている光景だった・・・。

「うそだろ！？どうして他の世界の怪人たちだこの世界に!？」

ユウスケが驚く。無理もない・・・なぜなら最近では変身どころか、戦うことすらまったくなかったのだ。

「そんなことは後から分かるだろ！！行くぞ！！」

そっいいながら士は久しぶりにディケイドライバーを懐から取り出し、腰にあて、カードを一枚取り出す。

ユウスケは腰に手をかざし、アマダム零石と呼ばれるもので出来たアークルと呼ばれる超古代のルーツを出現させる。

「変身！！」

『KAMEN RIDE・・・DECADE!』

第2話「新しい力」

士の姿が見る見るうちに変わっていく。その姿はマゼラン色のライダー、デイケイドに姿を変える。一方ユウスケの姿も赤を基調とした超古代の戦士、仮面ライダークウガ マイティフォームへと姿を変えた。

「何!？」

それをみた怪人たちは驚いた。どうやら士達のような存在は知らないらしい。

『ATTACK RIDE・・・BLAST!』

デイケイドが変身が終わると同時にバツクルにカードを入れ読み込ませた。そして腰についている。武器ライドブッカーを銃のように持ち、引き金を引く。するとライドブッカーの銃口からいくつもの光の弾丸が放たれ、数体のオルフェノクやワームにヒットする。ワームのサナギ体の何匹かはこの弾丸を喰らい、爆死してしまう。

「オリヤアアア!！」

デイケイドのブラストの攻撃と共に、走り出していたクウガは目標に定めたオルフェノク目掛けて必殺技のマイティキックを叩き込んだ!

「ギヤアアア!!!？」

その攻撃を喰らってしまったオルフェノクはたちまち、青い炎を出

し、一瞬で灰になってしまった。

残るは数体のワームだけだ。だがワームは脱皮をすでに終えていて、クロックアップをした。普通では入り込めない高速の世界からの攻撃にクウガはなすべがない。だがディケイドは、懐からカードを取り出し、バツクルに読み込ませた。

『KAMEN RIDE・・・KABUTO!』

ディケイドの姿が一瞬にして仮面ライダーカブト（Dカブト）に変わり、もう一枚カードをバツクルに入れる。

『ATTACK RIDE・・・CLOCK UP!』

次の瞬間Dカブトはワームと同じ、高速の世界に居た。

「ハア！フツ！！」

Dカブトは的確にワームの体に打撃を加えていく。ワームはたまたまず倒れてしまった。

「終わりにしてやる！」

そう言つてDカブトはまた一枚カードをバツクルに読み込ませた。

『FINAL ATTACK RIDE・・・KAKAKAKABUTO!』

「ハア！！！！」

Dカブトの回し蹴りがワームに炸裂し、爆発、それと同時に高速の世界から出て来る。

「土！やったな！？」

クウガがディケイドの元へと歩み寄る。

「当然だ！」

そっぴいなながらDカブトとクウガの姿は元の二人、土とユウスケの姿に戻った。

「でも、どうして他の世界の怪人同士が同じ世界に居るんですか？」

夏海が土達の元へと歩み寄る。今回の戦いはこれで終わったのだが、土はこの世界でまだたくさん戦うことになるような気がしてならなかった……。

「さあな……！？」

次の瞬間土達がいた場所の風景ガラッと変わる。一度、見たことがある。宇宙のような場所に地球がいくつも見える。

「お久しぶりですね……ディケイド……」

後ろから声が聞こえたので振り向くと、そこには、土に世界を破壊し創造をする旅に出ると言った張本人。紅渡がいた。

第3話「この世界の危機」(前書き)

流口クメンバーはもうチヨイ先です!!!

第3話「この世界の危機」

「お前は……何のようだ？」

士が渡を警戒しながら言う。彼と会った後はあまりいいことはなかった。以前なんかいきなりキバに変身して襲ってきたこともあったのだ。

「そう身構えなくてもいいですよ……今回はこの世界に起こっていることについて、少しお話があります」

そついいながら渡は、士達に話を始める。

「この世界には、もともとあなたたちが先程戦った怪人たちなどはいるはずがありませんでした……」

そこまで渡が言った後に、士が疑問を投げつける。

「じゃあなぜいる？」

ある意味当然の質問だ。いないはずのものがいると言うのだから。だが渡は軽く士の質問をスルーした様な形で話を続ける。

「この電波技術が極限まで発達したこの世界に、何か明らかに悪意があるものが入り込み怪人などをこの世界で暴れさせているのです」

「何のためにそんなことをするんですか！？」

夏海が、声を荒げながら言う。せっかく平和な日常が取り戻せたと

言うのに、また戦いが始まってしまいかもしれないのだ。

「それはまだ分かっていません……。ですが、鳴滝である可能性が高いです……。やつはもう破壊者の役目を終えたはずのディケイド、あなたをまだしつこく追っています」

「何だと!？」

士は驚く。狙われる理由はもうなくなったはず……。なのになぜ鳴滝はしつこく士を狙うのだろうか？そしてなぜこの世界を狙うのだろうか？

「私はその世界の行くことは出来ません……。この世界のことは頼みましたよ……。ディケイド」

「おいっ!？」

士が渡を呼び止めようとしたときにはもうすでに元の場所に戻っていた。そしてこの世界の士の役割は少し変わっていた。

「?……。なんだこれ？俺に小学校の教師になれってか？」

士の手にはあるものが握られていた……。そこには、【門矢 士
コダマ小学校教育実習生】と書かれていた……。

第4話「蒼い流星の少年」

【次の日】

「じゃあな、ちよつくらその学校とやらにいつてくるぜ!」

士がそういいながら、写真館を後にした。この世界でのやるべきことを探すために。

「行つてらっしゃい!」

ユウスケが士に向かって手を振りながら見送る。はたからみれば、何てことない、普通の日常に見えるだろうが、士の頭は、フル回転していた。

(この世界……一体どんな世界かまだ分かってない……下手に大きく動くのは危険だな……)

「やあ、士!」

士は名前を呼ばれ、振り返ると、自分たちと同じ、色々な世界を旅する仲間……まあ彼に関しては単独行動が多いのだが。

「海東! 朝っぱらから何のようだ?」

海東大樹、またの名を仮面ライダーディエンド。世界を旅するトレジャーハンターだ。

「この世界のお宝について、少し分かったことがあってね……」

偵察さ」

そういいながら大樹は、自分の指で銃を作り、それを、クツと上に上げ、バーン、と撃つまねをした。

「まつせいぜいこそ泥活動頑張るんだな・・・」

そういいながら土は、大樹からはなれるように、コダマ小学校へと向かっていった。

そして学校に着いた土は職員室に入っていく。

「やあ、君が門矢君だね？私は育田道德だ君の担当するクラスの担任をしている。よろしく！」

育田が土が職員室に入るなり、いきなり声をかけてきた。見た感じ温和そうな顔立ちで首にフラスコをかけている。

「ああ、よろしく」

「さあ、そろそろホームルームHRが始まる時間だ、いこう、門矢君」

そっぴいながら育田は土を連れて、教室へ向かっていった。

「おっいみんな、席に着け」

育田が、教室に入りながら、そういった。まあ、なんか見た目が普段行く世界よりハイテクに見えること意外はなんら変わりはない。普通の学校のような。

「えー今日はみんなに新しい仲間を紹介する。」

そう言うのと、教室はざわつき始めた。

「とはいっても、転校生じゃないぞ！教育実習生だ」

そして土が教室の中に入っていく。

「門矢士だ。まあ、よろしく」

そう言うて土はそっけなく自己紹介を終わらした。

「じゃあ今日のホームルームはこれで終わりにするぞー遊びすぎて一時間目に遅れるなよー」

そう言うて育田は教室を出ようとしたときに、何かを思い出したように土に振り返った。

「それと門矢先生は早くこのクラスのなれて欲しいから、この教室に残っててくれ」

無言でうなずく土を見てから、育田は教室を出た。もともと子供があまり得意ではない土は何をしたらいいのかも分からず、とりあえず再びこの世界ことについて考えようとした瞬間、クラスにいた女子に話しかけられた。

「門矢先生」

その少女は一言で言えばドリルヘアー。その髪型をみた土は一瞬固まる。

（な・・・なんだこの髪型・・・！？）

まあそんな疑問を土は無理やり心の中にしまいこみ、その少女の呼びかけに応じた。

「なんだ？」

「私わたしこのクラスの委員長をやらせていただいてる、白金ルナと申します。このクラスの友達はみんないい人ばかりなので、それを早く門矢先生にも知っていただきたいくて、一時間目にはみんなで自己紹介をさせていただきたいと思います。」

そういった白金ルナと名のつた少女に何か威厳と、いつも夏海に感じている恐怖を一瞬感じてしまった土は、「分かった」とした答えられなかった。

キンコーンカーン

学校のチャイムがなり、一時間目が始まるため、生徒たちはみんな席に着き始める。

そしてクラスに入ってきたのは、育田ではなく、別の先生だった。

「育田先生は？」

生徒の中の誰かが言う。するとその教師はその質問に答える。

「育田先生は体調を崩されたので、臨時で私が入った」

そんな教師をみた土は何か悪い違和感をその教師に覚える。

（なんだ・・・？）

「私はね、君たちのような純粋な子供たちが大好きなんだよ、食べちゃいたいくらいに・・・！！」

するとその教師首元からステンドグラスのような模様が、顔のほっぺ当たりまでに現れる。

すると一番近くの前の席の少年の頭上に透明の牙のようなものが現れる。

「危ない！！」

間一髪、土がファンガイアを蹴り飛ばし、その透明な牙は消えた。

「早く逃げろ！！」

土が叫ぶのをきっかけに硬直して動けなかった子供たちが、一斉に逃げ始める。

「うわあああ！！？」

「貴様ぐ！！私の食事を邪魔するとは……ただではおかん！！」

そのファンガイアは怒りと共に、ホースファンガイアに変身した。

もうすでに子供たちは逃げていたので教室には土とホースファンガイアだけ……否。逃げ遅れてしまったのか、サングラスをかけた少年が一人。

「おい！速く逃げろ！死にたいのか！？」

土が少年に向かって声を張り上げる。

するとファンガイアのその少年を襲い始めた。

「ちっ！！」

土は少年を庇うために、ファンガイアの前に立ちはだかる。変身してる暇がない。

「邪魔だ！」

ファンガイアは土を剣で切りかかろうとする。それを土はかわそうとするが、思ったより剣の動きが速かった。

「危ない！」

その自分が庇ったはずの少年が青い姿になり、その剣の攻撃を受け止めていた。

シューティングスターロックマン。この世界を守る蒼き流星の少年。

第4話「蒼い流星の少年」(後書き)

感想待ってます！

第5話「SSロックマン」

「こいつは……」

士は、目の前の光景を疑う。先程助けようとした少年が、青い姿に変身し、ファンガイアと戦おうとしているのだ。

「早く逃げてください!!」

そっぴいながらその青い姿をした少年はファンガイアと共に、教室の窓から、校庭へ飛び降りていった。

パシャ!

そんな一瞬を士は、いつも必ず持ち歩いている愛用のカメラに収める。すると士の後ろにもう一体のファンガイア、スパイダーファンガイアが現れた。

「やれやれ……こつちもか……」

そっぴいながら士は懷からデイクイドライバーを取り出し腰に装着し、一枚カードを取り出し、高らかに叫んだ。

「変身!!」

『KAMEN RIDE……DECADE!』

士の姿が仮面ライダーデイクイドへと姿が変わる。そしてライドブッカーソードモードを構えて、スパイダーファンガイアへと切りかか

った！

「ハアア！テヤア！」

ディケイドはブッカーソードでスパイダーファンガイアを連続で切りつけ、教室の外へ吹っ飛ばした。ディケイドはそれを追いかけるべく教室の外へ出るが、スパイダーファンガイアの姿はなかった。

「何？」

一方そのころ校庭では青い少年とホースファンガイアが戦いを繰り広げていた。

「何なんだこいつ？」

青い少年が、ホースファンガイアと距離をとりながらつぶやく。

「こいつ……電波体じゃねえな……一体何なんだ？」

青い少年の近くから声が聞こえるが、声の主の姿は見えない。

「とりあえず、やつつけよう、行くよウォーロック！」

「ああ、ぶっ潰してやるぜ！！」

その何かと会話した青い少年はホースファンガイアと戦うべく、腕についている標準装備の武器を向けて、発射した。

「ロックバスター！」

その青い少年の腕の武器から放たれた弾丸はまっすぐホースファン
ガイアへと着弾していく。

「ガアアアア!？」

まともに攻撃を喰らってしまったホースファンガイアは後ろによろ
けてしまった。だが、体制をすぐに立て直し、どこから取り出した
のか、剣を片手に青い少年に向かって走り出した。

「バトルカード・ソード!!」

青い少年の腕が剣に変わり、ホースファンガイアの攻撃を防いだ。

第5話「SSロッキマン」(後書き)

なんか中途半端に・・・

第6話「ディケイド」（前書き）

こっちの更新は久しぶりか・・・両立むずい！（↑じゃあはじめからやるな！！）とか言う突っ込みはなしで・・・

第6話「ディケイド」

ホースファンガイアと青い少年が戦っているさなか、もう一体のファンガイアが現れる。先程ディケイドが取り逃がしたスパイダーファンガイアだ。

「スバル！後ろだ！」

青い少年をスパイダーファンガイアが攻撃しようとした瞬間、横から銃の弾丸が放たれる。

「大丈夫か！？ロックマン！」

ロックマンと呼ばれた少年に、灰色の仮面ライダーのような姿をした青年が近づいてくる。仮面ライダーの样と言っても、やはり少しどこが違う。

「アシッド・エース！？暁さん！！」

アシッド・エースと呼ばれた青年は、アシッドブラスターと呼ばれる銃で、二体のファンガイアを攻撃する。

「ガハッ！？」

攻撃を喰らったファンガイアはのけぞってしまふ。

「ロックマン！こいつらは一体何なんだ？」

「分かりません……」

「そうか・・・だがとりあえずこいつらを倒すのが先決だ！行くぞロックオンソード！」

アシッド・エースの腕が剣に変わり、それでファンガイアを攻撃しようとする。が、スパイダーファンガイアから放たれた、蜘蛛の糸のようなものに当たり、身動きが取れなくなってしまう。

「何！？くそ！」

「曉さん！！！」

ロックマンが急いでアシッド・エースの救出に向かうが、ホースファンガイアに阻まれてしまう。

バキッドゴツ！

「ゲハッ！？！」

動けないアシッド・エースは容赦なくスパイダーファンガイアの打撃を喰らってしまう。

「曉さん！！！」

ロックマンは何度もアシッド・エースを助けようとするが、やはりホースファンガイアに阻まれ、助けに行くことが出来ない。その間にも、容赦ないスパイダーファンガイアの攻撃は確実にアシッド・エースの体力を削っていく。

「く・・・そ・・・！！！」

そしてついにアシッド・エースの変身が保てなくなり、人間の姿、
暁シドウに戻ってしまった。

「暁さん！！！」

ロックマンの注意が完全にシドウに行ってしまったのをホースファ
ンガイアは見逃がさない。

「スバル！！前だ！！」

「え！？」

ウォーロックと呼ばれた声に反応したロックマンだがもうすでに遅
い。ホースファンガイアの剣での攻撃が何度もロックマンの体を傷
つけた。

「ワアアアア！？」

「スバルーーーーッ！！！」

ロックマンはホースファンガイアの攻撃を受け、吹き飛ばされてし
まった。ホースファンガイアが追撃をせんと、ロックマンに一歩一
歩近づいていく。

「ク・・・ッ！！」

「スバル！！起きろ！！立て！スバル！！」

ウォーロックの必死の叫びのおかげか、何とかロックマンは立ち上

がる。そして次も来るであろう攻撃に備える。その瞬間！

「グワアア！？」

ロックマンの目の前でホースファンガイアが何かに吹き飛ばされる。

「何だ！？」

一瞬人のような形のものがかなり光速で動いているのが辛うじているのが見える。

その影は次々とホースファンガイアを攻撃し、ダメージはすでに相
当なものになっていた。そして、どこからか電子音が流れる・・・。

『FINAL ATTACK RIDE・・・FA FA FA
FAIZ！』

その電子音が流れた瞬間ホースファンガイアの周りに赤い閃光が次々と放たれ、それはドリルのような形になり、ホースファンガイアをロックする。

「ハアアアア！！！」

そしてそのドリルは一斉にホースファンガイアを貫き、その後ろにギリシヤ文字のφ（ファイ）の文字が浮かび上がり、ホースファンガイアはステンドグラスのように粉々に砕け散ってしまった。その影から現れたのはマゼラン色のライダー、ディケイドであった。

第7話「接触」

「あれは・・・？」

ロックマンは啞然としてデイクイドを見つめる。スパイダーファンガイアも同じだ。

「もう一体いるのか・・・ファンガイアと言ったらやっぱりこれか？」

そついいながらデイクイドはライドブツカーから一枚カードを取り出す。そしてそれをドライバーに読み込ませた。

『K A M E N R I D E・・・K I V A！』

電子音と共に、デイクイドの体がステンドグラスが砕け散るように表面が砕け、仮面ライダーキバの姿へと変わった。

「姿が変わった！？」

ロックマンたちが驚くのをよそに、デイクイドキバ（Dキバ）は、スパイダーファンガイアへとび蹴りを食らわした。

「テヤッ！」

「グハッ！？」

「まだまだ！」

そういいながらDキバは蹴りやパンチを的確にスパイダーファンガイアへと沈めていく。

「へっこれじゃあ話にならないな！」

そしてDキバはライドブッカーからまた一枚カードを取り出し、ドライバーに読み込ませる。

『FINAL ATTACK RIDE・・・K I K I K I
K I V A！』

するとDキバの足にあった鎖が弾き飛ばされ、周りが夜のように暗くなり、月も見える。

「ハアアアアッテヤアアアア！」

Dキバは大きく飛び上がり、落下が始まると、垂直に落ちていき、そのままスパイダーファンガイアに蹴りを叩き込んだ！

「グワアアアア！？」

するとDキバか蹴りを入れた場所を中心に大きくキバのマークが校庭の地面に刻まれ、スパイダーファンガイアは砕け散った。

「助けてくれたの・・・？」

ファンガイアを倒したディケイドを一時的に見方と判断したロックマンはディケイドにそう話しかけたのだ。

「あ？お前がこの世界を守ってんのか？」

「え……？この世界って？」

ロックマンはいきなり言われたことの意味が分からなかった。この世界とはどう意味なのかを……。

するとディケイドは変身を解き、士の姿になる。

「だったら話したいことがある。とりあえずこの世界のことについて教えてくれ、こつちも勝手が分からなくて困ってるんだ」

「え？それってどう言うことですか……？」

ロックマンも電波変換を解き、先程の少年。星河スバルへと戻る。

「いいから来い！」

士が強引にスバルの手を引こうとした瞬間、誰かに手をつかまれえる。

「おいおい、話があるだけならそんな手荒いまねをしなくてもいいんじゃないか？」

「暁さん！」

「ちっ、じゃああんたも一緒に来るってことでどうだ？」

案外そんなに怒らなかった士はそう暁に提案する。

「あ、それならいいよ？」

そして暁も案外あっさりとOKを出した。

第7話「接触」(後書き)

すばらしいぐらいにグダグダ・・・

感想待ってます！

第8話「信用と共闘」（前書き）

今回はこちらの更新ですね。しばらくこちらは更新できなかったの
で待っていてくれた方々（いるのかっ！？）申し訳ありません
でした。

では第8話です！

第8話「信用と共闘」

「ってわけだ・・・分かったか？」

光写真館にて、土が自分のいきさつを全て話す。当然と言えば当然だが、暁とスバルはいまいち信じられないと言つかをしていた。

「そんな夢みたいな話を信じろと？」

暁が土にそう聞く。普通なら話ただけで信用させるのは難しいだろう。

「じゃあさつきの怪物、ファンガイアはどう説明するんだ？少なくともこの世界のものじゃないんだろ？」

「それは・・・」

たしかに、今までの戦いで、あんな怪物は見たことがなかった。そう思った暁は土に言葉を返せなくなってしまった。

「僕は・・・信じます。だって嘘をついているようには見えないし」

そういったのはスバルだ。確かに土は何一つ嘘はついていなかったがこんなにもあっさり信用してもらえらると思っていなかった。

「まあ・・・そう言うことだな？次はあんたたちと、この世界のことについてでも話してもらおうか？」

「この世界って・・・一体何から・・・」

PPP! PPP! どこからか呼び出し音が流れる。すると暁が懷から機械を取り出し。その機械で呼び出しに応じた。

「大変だ! 暁!! WAXAに保管されていたエースPGMが・・・
ぐはっ!!」

空中に画面が現れ、そこに人が映ったかと思うと、用件を伝えている途中に、攻撃を受けて気を失い、途絶えてしまった。

「どうした!? エースPBMがどうしたって!? くそっ!! スバル行くぞ!!」

「はい!!」

「話はまた今度だ!!」

そう言っただけで暁は急いで写真館を出て行った。

「さてと・・・俺たちも行くか・・・」

「ああ!」

そう言っただけで士とユウスケも、暁の後を追うべく写真館を後にした。

WAXA内部

網で出来た廊下の天井裏に、人影が隠れている。

「速く探せ!!」

その下の廊下を何人かが走ってゆく。おそらく彼を探しているのだろう。人影が見えなくなると、天井の網を蹴り落とし、廊下に着地する。

「エースPGM・・・本来電波に関しては有害でしかなかったノイズをコントロールし兵器に使用できる・・・すばらしいお宝だ」

そう言つて海東は、エースPGMを大事に懐にしまい、出口に向かって走り出した。

ダッダッダッダッダッ・・・海東は入るときにも使った地下道の出入り口にたどり着く。

「そこまでだ!」

声が聞こえ振り向くと、何人ものこの世界の警察のような組織の間が海東に銃を向けていた。

「やだなあゝそんなものを向けられちゃうと困るよ」

だが海東はそんな状況にもまったく余裕を崩さなかった。そしてどこからかディエンドライバーを取り出すとそれを相手の足元に向かって発砲した。

「何!？」

そのため相手は物陰に隠れることを余儀なくされ、銃声が聞こえなくなつたところには、海東の姿はどこにもなかった。

海東はとつくに外に出ていた。

「やったあ」

「悪いがそれを返してもらえないか？」

満面の笑みを浮かべていた海東だったが、後ろから聞こえた声に振り向く。そこには暁、それとスバルがいた。

「やだねせつかく奪つたお宝をわざわざ返すわけないだろ？」

「そうか、だつたら仕方ないな・・・はあ!!」

暁が海東目掛けて拳を突き出す。海東はそれを避けると、暁の腹に蹴りを入れるが、腕でがっちりつかまれてしまう。だがあまつたほうの足で、もう一度蹴りを入れた。

「くっ!？」

「シドウ、ここは私に任せてください」

「すまないアジット頼んだ！ウィザード・オン！」

暁が機械を操作すると電波体、ウィザード、アジットが姿を現した。

「暁さん大丈夫ですか！？病み上がりなんですから、無茶しないでください！」

スバルが暁へ駆け寄り安否を確認する。

「大丈夫だ！それよりアイツを！」

「ウォーロックー！」

「任せとけ！」

そしてまたアジットと同じでウィザードのウォーロックが現れた。

「僕の邪魔はしないでくれないか！？」

そう言つて海東はディエンドライバーと、カードを一枚取り出し、カードをディエンドライバーに装填した。

『KAMEN RIDE・・・』

そして海東はディエンドライバーを真上に向けるそして掛け声と共に引き金を引いた。

「変身!」

『DI・END!』

海東はディケイドに似たシアンブルーの仮面ライダー、ディエンドに変身した。

第9話「ディエンド」

「何だと!？」

海東のディエンドへの変身を見た暁は驚いてしまふ。姿がどこなくディケイドに似ているが、違う場所がところどころにうかがえる。

「青い、ディケイド・・・？」

それは、暁の率直な感想だった。始めて見れば、そう見えなくもないかもしれない。

「土なんかと一緒にしないでもらえるかな？」

そう言いながらディエンドはアシッドに向かって、ディエンドライバーを構え、弾丸を放つ。

「ゲハッ!？」

弾丸などと言うものは避けられるはずもなく、容赦なくアシッドの体に吸い込まれていく。

「アジット!! トランスコード、シューティングスターロックマン
!!」

攻撃を受けたアシッドを見たスバルは、とっさにロックマンへと変身しアジットを庇うようにディエンドとアシッドの間に立つ。

「止める!!! これ以上この人たちを傷つけるなら、僕が相手だ!!!」

「まったく・・・分からないな、君たちは・・・」

ディエンドは、ディエンドライバーに一枚のカードを入れ、銃の引き金を引いた。

『K A M E N R I D E ・ ・ ・ I X A !』

すると、ディエンドの前にライダーの形をかたどったシルエットがいくつも重なり合い、ディエンドが召還したライダーが、姿を現す。白い聖職者をモチーフにしたライダー【仮面ライダーイクサ】が姿を現した。

「なんだ!？」

「彼の相手は君に任せるよ」

ディエンドはイクサの肩をポンツと叩きそいつた。それを聞いたイクサはうなずき、こう言った。

「任せなさい・・・!」

イクサの妙な自身をよそにディエンドは、カードをまた一枚取り出し、それをディエンドライバーに装填しようとしたが、その瞬間に何かにカードを奪われてしまった。

「何!？」

「危ない危ない・・・またこれで何かをしようとしていたんだな」

そう言つてディエンドから奪った【インビジブル】のカードを持ちながらロックマンの横にアシッド・エースが現れた。

「暁さん！」

「よっ！スバル！さっきぶりだな！」

そついいながらアシッド・エースはロックマンに微笑んでみせる。相手の戦術を一つ封じたのだから余裕が出来たのだ。

「さて、とりあえずあの白いのを倒すか！」

白の・・・イクサのことだ。

「私に逆らうとはおろかな・・・」

そつ言いながら、イクサはイクサカリバーを構え、アシッド・エース目掛けて、走り出した。

「ロックオンソード!!」

ガキィ!!

二つの刃が交じり合う。アシッド・エースはそのまま力比べはせず、後ろに下がり、銃を構えた。

「アシッドブラスター!!」

「グワアアア!!?」

アシッドブラスターから放たれた弾丸がイクサに数十発全てが直撃し、イクサは跡形もなく消滅した。

「ふう！」

『ATTACK RIDE・・・BLAST!』

急に流れる電子音と共に、アシッド・エースに青い弾丸が何発も放たれ、アシッド・エースは避けることが出来ずに全てに直撃してしまった！

「グアアア!？」

「そのカード、返してもらえるかな？」

ディエンドがディエンドライバーをアシッド・エースに向けた状態で、近づいてくる。

「いいよ？」

「「え？」」

ディエンドとロックマン。二人の青い戦士はアシッド・エースの思っても見なかった答えに思わず、声をそろえて驚いてしまった。

「ただし、エースPGMと交換な」

なんだ、そう言うことかといわんばかりにロックマンは胸をなでおろし、ディエンドはやっぱりと言わんばかりの顔を仮面の下でしていた。

「悪いけど却下だね」

意地？プライド？とにかく海東は交換など、応じる気はまったくないようだ。どつかの世界でも、その世界のお宝と、ディエンドライバーを交換する羽目になったことがあったのだ。だからなのは分らないが、今の彼にはその交換に応じる気はまったくなかった。

『ATTACK RIDE・・・BLAST!』

「!？」

「まったく・・・誰かと思ったら・・・お前だったのか・・・」

突如として、ディエンドに赤い弾丸が放たれ、その方角から声が聞こえた。その人物は・・・。

「士・・・」

「「門矢!^{さん}!？」」

第10話「とりあえず解決？」（前書き）

どうも！ネクサスです！

こちらの更新は久しぶりですな・・・

第10話「とりあえず解決？」

「何の用かな？」

ディエンドは思っても見なかった妨害者、ディケイドに話しかける。

「海東！それを返してやれ」

「やだね」

士が現れても、話し合いは結局平行線。進展する様子がない。

「インビジブルのカード、曉に取られてんだろ？だったらとつと交換に応じればいいだろ？また盗み出せないことはないんだから」

ディケイドの言うことは的を引いている。この世界にはまだ来たばかり。そんな中でこの世界からいなくなるとは考えづらい・・・だからまだ無償で手に入れられるチャンスがあると言うことだ。

「・・・いいだろう」

決断するなら早いほうがいい。そう海東は思った。こんな平行線をいつまでも続けても時間の無駄だ。それは誰しもが分かっていることだった。だからこそなのだ。

「オツケ！じゃ！交渉成立だな？」

そう言うときアシッド・エースはインビジブルのカードを地面に置く。その行動を見たディエンドもエースPGMを地面に置き、二人の向

く敵のものに向かつて、同時に歩き出し、ディエンドはインビジブルを、アシッド・エースはエースPGMを、それぞれ拾い上げた。

「じゃ！またいつか、頂に上がるね？それまで大事に保管しておいてくれよ？」

そう言うと、ディエンドはインビジブルのカードをディエンドドライバーに読み込ませる。

『ATTACK RIDE・・・INVISIBLE！』

そしてディエンドは霧のようにその場から姿を消した。

「ふう！サンキューな！土」

アシッド・エースは暁の姿に戻り、ディケイドに歩み寄る。それを見たディケイドも、変身を解き、土の姿に戻った。

「まあな・・・ところで、海東は一体何を盗もうとしてたんだ？」

土は暁に聞く。土は先程来たばかりなので、海東が何を盗もうとしていたかまでは知らないのだ。

「ああこれはエースPGM。ノイズの電波に対する悪影響をなくす装置だ」

そついいながら暁は、エースPGMを土に見せる。

「なるほど、大体分かった」

エースPGMを少し見ただけで土はそんなことを言う。土はこのセリフをよく言うが、正直分かっていないかは不明である。

「スバル、これ、もう一度預かっててくれないか？駄目ならいいんだが」

暁がスバルに歩み寄りエースPGMを渡す。

「え？」

以前土がこの世界に来る前に、スバルは一度暁からこのPGMを預かり、見事に使いこなしていたときがあったのだ。とはいっても、エースPGMの力の源は、すでにこの世界から消滅してしまっているため、ノイズの影響をなくす。と言う機能しか、使えないのだ。

「駄目か？」

「もちろん！僕なんかでいいなら預かりますよ」

そっぴいながらスバルは暁から、エースPGMを受け取った。

「ありがとう！スバル！」

暁はそっぴいながら笑顔を見せた。

そのころ、土と一緒に写真館を出た。小野寺ユウスケは・・・

「じじどじじ」

完全に迷っていた・・・。

第10話「とりあえず解決？」（後書き）

感想待ってます！

ではっ！！

第11話「破壊するべき世界」

「ハッ!!」

デイクイドに変身している士は、ジャック・コーヴァスと呼ばれるカラスのような姿をした電波人間にライドブッカーソードモードを振り下ろす。

「・・・・!!」

それを喰らったジャック・コーヴァスは後ろに吹き飛ばされてしまう。このような状況になってしまった経由として、約1日前までさかのぼる。

「なあ士、俺たちに協力するつもりはないか？」

エースPGMを取り返してから数時間後、自体を完全に沈静化させてから暁が、士にそういったのだ。

「ああ、いいだろう。どうせ他のやつにも頼まれたしな」

「ありがとう！助かる。とりあえず今すぐに動くことはないから、帰ってもいいぞ？上の連中信じさせんのは難しそうだしな」

「まあそれもそうだな・・・じゃ！俺はいったん帰るとするぜ」

そついいながら士は愛用のバイク【マシンデイクイダー】に乗る。

「あ！そつだ士！お前連絡手段がないだろ？ほら！」

何かに気づいた暁は懷からハンターV.Gを4台取り出し、士に渡した。

「これがないと、何も出来ないからな」

そつ言つて暁は自分の持ち場に帰つていった。

「・・・ユウスケはどこに行った？」

士はバイクのエンジンをふかしながら、ふと、思い出したようにつ

ぶやき、しばらく考えた後。

「まあ、どうにかなるだろ……」

その結論にたどり着いた士はバイクを走らせ、WAXAを後にした。

そして次の日、まあなんだかんだありまして……無事、小野寺ユウスケはその日のうちに帰ってくることが出来まして、士達は再びWAXAへ向かうために、写真館を後にした。

それを見ている中年の男がいた。その男は士が近くを通り過ぎるのを見て、静かにつぶやく

「おのれディケイド……！この世界は破壊すべき世界だ！！」

なぜお前は这个世界を破壊しようとしなない……！だったらこの私が……」

その中年男性、鳴滝がそこまで言い終わると同時に、鳴滝の隣に、ジャック・コーヴアス……の残留電波が実体化し現れ、土に向かって行った。

その気配にいち早く気づいた土は、ジャック・コーヴアスの攻撃をうまくかわし、バイクを止める。

「土！大丈夫か！？」

ユウスケもバイクを止め、土の無事を確認する。

「ユウスケ！先に晧たちのところに行ってる！」

土がユウスケに言うと、ユウスケは土を信じ何も言わずに、WAX Aへ向かった。今度はちゃんと着けばいいのだが……。

「さて……遊んでやるぜ、ガキガラス！変身！！」

『K A M E N R I D E …… D E C A D E ！』

土はすぐさまディケイドに変身し、ライドブッカーをソードモードに変形させ、ジャック・コーヴアスに向かって振り下ろした！

第11話「破壊するべき世界」（後書き）

「短いっ！」　つつつこみは受け付けないぜ！（キリッ！

第12話「仮面ライダーVS電波人間」

「ハッ！セヤア！」

ディケイドは、ジャック・コーヴァスをライドブッカードで、次々と切りつける。

「・・・・！！！」

ジャック・コーヴァスはたまらず、自分の背中の羽を使い、空中へと飛び上がり、ディケイドの攻撃を避ける。

「チッ！」

すると次の瞬間ジャック・コーヴァスは、ディケイドに向かって急降下、エアロダイブと呼ばれる空中からの、体当たり攻撃を放つ。

「グアアアア！！！」

ジャック・コーヴァスのすばい防御から、攻撃の転換に後一歩ついていくことが出来なかったディケイドは、その攻撃をモロに喰らってしまった。その次にはジャック・コーヴァスは再び空中へ飛び上がり、ディケイドの手の届かない場所へ行ってしまった。

「このやろっ！！！」

剣のリーチでは到底届かない。そう思ったディケイドはライドブッカードからカードを一枚取り出し、ディケイドライバーに読み込ませる。

『ATTACK RIDE・・・BLAST!』

ディケイドはライドブッカーをすばやくガンモードに変えると、無数の赤い弾丸をジャック・コーヴアスへ向かって放った。

「!」

ジャック・コーヴアスは弾丸を避けようと、すばやく動き出し、全てかわされてしまう。ジャック・コーヴアスは空中戦が得意であるようだ。

するとジャック・コーヴアスはお返しと言わんばかりにあたりに紫色の炎を出現させ、それをディケイドへ向かって放った。

「くそ!」

その攻撃をかわしながらディケイドは再びカードを一枚ディケイドライバーに読み込ませた。

『KAMEN RIDE・・・BLADE!』

『FORM RIDE・・・BLADE JACK!』

ディケイドは、ブレイドに変身した後、すばやくもう一枚、カードを使い、【仮面ライダーブレイド ジャックフォーム】へ強化変身した。

「さあ行くぜ!」

『ATTACK RIDE・・・BLAYROUZER!』

Dブレイドジャックフォーム（以下DブレイドJF）は飛び上がると、ブレイラウザーを片手にジャック・コーヴアスへ切りかかった!

「!?!」

ジャック・コーヴアスはまさかディケイドが飛ぶとは思っていなかったらしく、完全に反応を遅らせてしまった。

「フツ!」

DブレイドJFはジャック・コーヴアスを地面に叩き落とすと、止めを刺すためのカードをディケイドライバーに読み込ませた。

『FINAL ATTACK RIDE・・・B B B BLADE!』

「ハアアアア!」

DブレイドJFの必殺技、ライティングスラッシュを地上で立ち上がろうとするジャック・コーヴアスを一閃した!

「・・・・!?!」

その必殺技を喰らったジャック・コーヴアスは跡形もなく消滅してしまった。

「ぶっ・・・・!?!」

敵を倒し、一息ついたDブレイドJFに水で作られた龍が突然襲い掛かってきた！

当然こんな不意打ちを避けることは出来ず、攻撃をくらってしまった。

「ウワアアア！！」

その龍に引き飛ばされたDブレイドJFはその襲撃で、ディケイドの姿に戻ってしまった。

「くっ！」

ディケイドはすぐに立ち上がると、攻撃が飛んできた方向を見る。するとそこには杖を持ち、水を連想させる色合いのドレスのようなものを着た電波人間【クイーン・ヴァルゴ】が立っていた。

もちろんこちらにも残留電波で、以前クイーンヴァルゴに変身していた女性にはまったく関係はない。

ディケイドはブッカーソードを構え、いつでも動ける体勢をとる。と、次の瞬間クイーンヴァルゴの足元に、銃撃が放たれる。ディケイドがやったものではない。

「なんだ・・・？」

「土！大丈夫か！？」

次の瞬間後方から声が聞こえ、そちらの方向に振り向くと、アシッド・エースがアシッドブラスターを構えた状態で立っていた。

「まあな」

ディケイドは一度構えを解き、アシッド・エースへ向き直る。

「とりあえずは安心したな。まさかお前がこいつらの残留電波と戦っていたなんてな」

「残留電波？」

聞きなれない単語に、ディケイドは思わず聞き返してしまった。

「ああ、電波人間やウィザード、電波体がデリートされても完全に消えてなくなるわけじゃないんだ。それはデータの塊としてあたりをうようよしてるだけなんだが、たまにあっという風にもとの形を復元しちまうやつもあるんだ・・・」

「なるほどな？つまりあいつらは電波の幽霊みたいなもんか・・・」

「まあそう言うことだな」

「OK、だいたい分かった・・・それじゃあ・・・」

「行くぞー!!」

アシッド・エースとディケイドは、会話が終わるとほぼ同時に、地面を蹴り、クイーン・ヴァルゴに向かっていった。

第13話「アシッド・エースの弱点」(前書き)

どうも皆さん遅くなってしまいましたが、13話です！

どうぞー！

第13話「アシッド・エースの弱点」

ディケイドと、アシッド・エースがクイーン・ヴァルゴヘブッカーソードと、ロックオンソードでほぼ同時に切りつける。

「!？」

クイーン・ヴァルゴはその攻撃を喰らってしまい、数歩後ろに下がる。

「フッ！セヤッ!!」

「ハッ！テヤッ！」

だが二人は次々と、攻撃を加えていく。クイーン・ヴァルゴはジャック・コーヴァスとは違い動きも速くない上に、二人を相手に戦っているため、ここまで差が出来てしまう。だがやはり最大の要因は、相手が明確な意思を持たない残留電波と言うところにあるだろう。だが……。

「!?!」

ディケイドの前から、いきなりクイーン・ヴァルゴが姿を消した！まるで、ディエンドがよく使用するインビジブルのカードを使ったかのように。

「なっ!?!どこ行きやがった!？」

「周波数を変えたんだ!!」

ディケイドがクイーン・ヴァルゴの行方を捜していると。アシッド・エースが説明しクイーン・ヴァルゴと同じように姿を消した。

「おい!？」

一瞬意味が分からなくなったディケイドだが、次の瞬間、何かと何かがぶつかり合う音。そして空中で何か不自然に波打っている場所がいくつも見えた。よく音を聞くと、その波打っている場所の中心から出ている音だと言うことも分かった。

「周波数を変えた……か」

流石のディケイドも自分の体を電波に変えるのは無理だった。

「後はアイツらの戦いってことか」

そうつぶやきながら、ディケイドは波打っている空中を眺めていた。そして戦っているアシッド・エースはというと……。

「その姿……やっぱ気に入らないな……それが誰かに利用されてるならなおさらだ!」

そういいながらアシッド・エースはロックオンソードで切りかかるうとするが、その場にひざをついてしまう。

「くっ!？今かよっ!？……もうちょっともってってくれっ!」

自分の体と必死に戦うアシッド・エースだが、クイーン・ヴァルゴはそれを見ているだけって言う優しいことはしてくれなかった。彼

女はディケイドにやっとなのと同じように水の龍を作り出し、それをアシッド・エースへ向けてはなった！

「シドウ！来ます！！」

アシッドがアシッド・エースを庇うように現れるが、電波人間の攻撃をいくらバトル専用のバトルウィザードと言えど、ともに喰らえば平気なはずがない。

「「うわああああ！！？」」

クイーン・ヴァルゴの攻撃をモロに喰らってしまった、アシッド・エースとアシッドは立っていたウェーブロードから吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられると同時に電波変換が解けてしまった。

「ぐ・・・あ・・・」

「おい！シドウ！！」

ディケイドがシドウに近づくが全身ボロボロの状態であった。

「土・・・やっぱ病み上がりだと、アシッドとの電波変換はきついわ・・・」

「しゃべんな！！・・・ったく・・・ユウスケはどこで何やってんだ！？」

「門矢さん！！」

「土！！」

「スバル！ユウスケ！！たく！どこ行ってやがった！」

スバルとユウスケの登場に、少しは心の余裕が出来たディケイドだが、それを尻目に、クイーン・ヴァルゴが再び、彼らの前に姿を現した。

「ごめん！途中で実体化したウイルスと出くわしちゃってさ」

そういいながらユウスケは、腰に手を当て、クウガの変身ツール、アークルを出現させる。そしてお決まりの変身ポーズをとり、叫んだ。

「変身！！」

そして次の瞬間にはユウスケは、仮面ライダークウガへと姿を変えていた。

「僕たちも行くよ！」

「よっしゃ！行くぜ！！」

「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

スバルもすぐさまロックマンに電波変換する。だが、

「スバル・・・お前はシドウを頼む」

「門矢さん！？でも・・・」

ディケイドの一言に困惑するロックマンであったが、シドウの容態ははつきり言って決してよくはないだろう。

「早くしろ!!」

「・・・分かりました・・・」

ディケイドの言葉を聞き入れたロックマンは暁を担ぎ、WAXAへ急いだが、一匹納得していないものがいた。

「ちょスバル!?俺は戦いに来たんだああああ!!!!」

「ウォーロック!ちよつと黙ってて!!」

そんな声が後方から聞こえたのを軽く無視したディケイドはクイン・ヴァルゴへ向き直った。

「さて、また消えられるのも厄介だからとつと決めるか!」

『FINAL ATTACK RIDE・・・DE DE DE
DECADE!』

「はああああ!!」

その電子音と共にディケイドは高く飛び上がると、ディケイドの前に大きなカードがいくつも浮かび上がる。

それと同時にクウガも足が少し燃え上がると同時に、走り出し、前方へ大きくジャンプするそして、

「テヤアアアアア！」

「オリアアアアア！」

ディケイドの必殺技【ディメンションキック】とクウガの必殺技【マイティキック】が同時に炸裂し、クイーン・ヴァルゴは消えてなくなった。

第14話「サテラポリス遊撃隊新隊長 門矢士!？」

「暁さん!」

「ぐ……!」

病院の奥へ急いで運ばれてゆくシドウをスバルは必死に呼びかけながら追いかけてゆく。スバルの表情からかなりあせっているのが分かる。

「シドウ……」

士はただ、それだけでつぶやくと、走るのをやめ、シドウを見送った。

「暁さん……」

「スバル、アイツ一体電波の世界で何があつたんだ?アイツはそう簡単にやられるようなやつじゃないのはもう十分わかる……だから……一人だからと言ってあんなやつにどうしてあそこまで……」

「暁さんは体がボロボロなんです……アジットとの電波変換は人間に大きな負担を与えてしまうらしいんです。それを暁さんは多用した上に、一度死に掛けるぐらいの大怪我をして今……奇跡的な回復で現場に戻ってきたばかりだったんです……」

スバルがうつむき、暗い表情をした状態で士に説明する。

「なるほどな．．．だいたい分かった」

士は手をひらひらさせながらいつものセリフで受け流した。自分から聞いたという受け流すというのはどうかと思うが、それが門矢士という人間なのだ。

そして士達は病院を後にし、WAXAへと向かった。

「ふう．．．中はこうなってたのか．．．」

「おい士！ちよつと堂々としすぎだぞ！？もうチヨイ謙虚になれつて！」

あまりにWAXA内を傍若無人に歩く士の隣を歩いていたユウスケがそう注意するが士は注意を聞き入れようとしない。

「お前がびびりすぎなんだよ！勝手に入ってきたわけでもねえんだからもつと堂々とすればいいんだよ！」

そう言う士を横から見るユウスケは諦めたかのようにため息をつき、スバルは苦笑以外は特にしていなかった。

「君か？暁君の言っていた男は？」

士の前に一人の老人が現れる。

「お前は．．．？」

「ちょ！？士！お前はもうちよつと言葉を選べって！」

ぶつきらばうに聞く士にまたユウスケが注意するが今度はそれを士は完全に無視した。

「まあべつにかまわんよ・・・私はここの長官をやらせてもらっているものだ」

そう老人は言うが、士は警戒を解こうとしない。

「ほう・・・そのお偉いさんが俺に何のようだ？」

「先程言ったように君の事は暁君から聞いている。それを踏まえて君にお願いしたいことがあってね」

「面倒がない程度ならな」

「はっはっはっ！面白いことを言うな君は。暁君が不在の今、君にある部隊の指揮をお願いできないかと思ってるね」

「で？そのある部隊ってのはなんだ？」

「今は一時解散している。サテラポリス遊撃隊という部隊だ。今回の事態を受けて再結成をし、それを君に任せたいんだ」

「え！？」

それを聞いたスバルが驚く。サテラポリス遊撃隊といえば、以前暁が隊長を勤め、スバルも所属していた部隊で、以前ディーラと呼ばれる組織と戦うさい組まれた特別な組織である。

「見ず知らずの俺でいいのか？」

「あの暁君が認めた青年だ。間違いはないだろう」

ためらいのない長官の言葉に、何かを感じた土はこの仕事を引き受けることにした。

「あんだ、シドウを信用しているんだな」

「ここのエースを信用しなくてどうするんだ？」

「それもそうだな・・・いいぜやってやる！この俺に苦手なことはないからな！」

そう言いながら土は拳を前に突き出した。

第15話「孤高の戦士」(前書き)

まあタイトルの通りあの少年の登場ですな

第15話「孤高の戦士」

「ふう……」

士はサテラポリス本部内で、ゆっくりといすに座る。

スバルは、士を中心としたサテラポリス遊撃隊をころよく受け入れ、他のメンバーだったものたちへも声をかけてみると、どこかへ向かっていつてしまった。

とりあえずすることもないので、シドウの机に大量にあるうまい棒のうちの1本を取り出す。

「しかしどうしてこんなにあるんだ……?」

確かにシドウの机に残されたうまい棒は、ダンボールにぎっしりつまっている。しかもそのダンボールがまだいくつがあるから驚きだ。

「まあいいじゃないの?」

そついいながらシドウの机から一気に2、3本うまい棒を取り出したのはユウスケだ。しかももう口に運んでいる。どう考えても無駄な早業だと言わざるおえない。

「お前……」

そついいながら士はシドウの使っていたいすに座り、うまい棒を食べ始めた。ちなみにユウスケはもう全て食べ終えている。

そうしているうちにけたたましく警報が鳴り始める。おそらくは、敵でも出た。と言うところだろう。サテラポリスの隊員たちはあわただしく動き始め、それぞれの持ち場へと向かって行った。

「さて・・・行くか!」

そう言う土はいすから立ち上がり、敵の出現ポイントだけを地図で調べた後、外に出て、マシンディケイダーにまたがった。ユウスケもその後続く。

数分後、土たちは現場に到着する。すでにサテラポリスがいる。相手は・・・グロンギ、オルフェノクが伺える。状況は劣勢だ。

「変身!」

『K A M E N R I D E・・・D E C A D E!』

その掛け声、電子音と共に、土はディケイドへ、ユウスケはクウガへと変身し、怪人たちへ向かっていった。相手は2体。これなら一対一で戦える。

「ハッ!セヤッ!」

「フッ!オリア!」

ディケイドはオルフェノク相手にブッカーソードできりつけていく。クウガもグロンギ相手にキックやパンチを織り交ぜながら確実に攻撃を当ててゆく。

グロンギたちは二人のライダーの攻撃にたまらず後方へ飛ばされる。

二人はさらに追い討ちをかけようとするが、突如として二体の怪人を爆殺する紫色の斬撃によって、踏みとどまることを余儀なくされてしまった。

「な・・・！？」

「えっ！？」

突然のことで驚く二人だが、その中から、少年が一人現れた。それは、スバルが変身したSSロックマンとは違い、紫色のバイザーを付け、胸の辺りに、何かの紋章のようなデザインが伺える。

「誰だ・・・？」

ディケイドが静かにつぶやく。少年は殺意むき出でディケイドを見るとディケイドの質問を無視し、質問で返す。

「貴様がディケイドか・・・」

「おい、先に質問したのはこっちだぜ？」

「正直この世界の人間などもどうでもいいが、この世界ごと破壊すると言うのが気に食わん！」

そう言っただけ少年は、手に持った曲刀でディケイドに切りかかる。ディケイドはそれをブッカーソードで受け止めた。

「ちっ！鳴滝の野郎に吹き込まれたな！！久々にそんなこと言われたぜ？」

「だからどうした!!」

そついいながら少年は後方に飛び、今度は持っていた曲刀を投げ、それは回転しながらまっすぐにディケイドに向かつていった。

「チイ!?!」

ディケイドはそれを横に飛びかわすとカードを一枚ディケイドライバーに読み込ませる。

『ATTACK RIDE・・・BLAST!』

ディケイドは電子音と共にライドブッカーをガンモードへ組み替えると、赤色弾丸を複数発射し、弾丸は少年に吸い込まれるようになって向かってゆく。

ーヴウウウンー

だが突如として少年の前に、謎の文字が刻まれている透明な壁が現れディケイドの攻撃を防いだ。

「何・・・?」

「フン」

驚くディケイドをよそに先程投げた曲刀がまるでブーメランのように回転しながら少年の元に戻りそれを少年はキャッチする。

「ブライ!ちよつと待って!!」

どこからか声がしたかと思うと、ディケイドの隣にロックマンが現れ、先程彼と戦っていた少年をブライと呼び、制止した。

「ロックマン……邪魔をするな……そいつは破壊者だと聞いている。そいつを庇ったところでこの世界が破壊されるだけだぞ」

少年……ブライはロックマンに向かってそう言い放つがロックマンはそれを強く否定する。

「それは違う！確かにこの人はそう呼ばれていたと聞いたけど、それでもこの人はこの世界を……いやこの世界だけじゃなくっていろんな世界を救おうとしているんだ！！」

ロックマンは強くそう言う。会ってまだそこまで経っていないが、それでも彼はそれを確信していた。ディケイドはこの世界を破壊するために訪れたわけではないのだと……！！

「フン……また貴様の言う絆か……。いいだろう。だがこいつが世界を破壊しない保障はどこにもない。怪しい行動をすれば俺はすぐにでも貴様を消す」

それだけ言うとブライはその場から姿を消した。

「やれやれ……。結局俺は今でも破壊者ってことか……」

ディケイドはそれだけつぶやくと、変身を解き、マシンディケイドにまたがった。

第15話「孤高の戦士」(後書き)

ユウスケが空気過ぎる・・・

感想待ってます!!

第16話「門矢隊長の入隊試験!？」（前書き）

どうもこちらの更新は久しぶりな気がするネクサスです！

久しぶりの更新にも関わらず若干意味不明さが漂っていますが、暖かい目で見過ごしてやって下さい。

お願いします！

ではっ！

第16話「門矢隊長の入隊試験!？」

「土君!!」

サテラポリス本部に帰ってきた土を待ち受けていたのは光夏海その人。どうやら怒っている様子で。

「どうした？夏みかん？」

「夏海です!!というか私に黙って何色々しているんですか!？」

夏海は怒鳴りながら土に近づいて行く。

「お前の許可を取る必要はないだろ？」

土は素っ気なくそう答えるが、それは夏海の怒りをあおるだけであつた。

「許可とかそう言う問題じゃありません!!」

「まあまあ夏海ちゃん」

ユウスケが夏海をなだめようと土の後ろからひょこつと顔を出した。

「ユウスケは黙ってて下さい!!」

夏海はキツとユウスケをにらみ、それに怯えたユウスケは再び土の後ろへ隠れてしまった。

「とにかく、笑いのツボ!!」

「ハハハハハハ!! やめっ!!」

夏海が親指を立て、それを土の首もとへ押し込むと、土はいきなり笑い出してしまった。これが光家秘伝【笑いのツボ】である。

「それは反則だっていつも言ってたろ!？」

少し落ち着いた土は夏海にそう怒鳴る。

「土君が勝手に自分一人で色々決めちゃうのがいけないんです!」

だが結局夏海の怒りは収まる事がなかったので土は逃げるように遊撃隊のために用意された部屋に向かっていった。

「あっ! 門矢さん!」

その先にはスバル、それからピンク色のパーカーをした緑色の目のかわいらしい少女、その子とは対照的に太っていていかにも大食いです。という雰囲気をかもし出している少年がいた。

「誰だ? そいつら?」

土は見慣れない二人を見て、スバルに問いかける。

「二人は、遊撃隊の残りのメンバーです!」

「はじめまして! 響ミソラです!」

「おう！牛島ゴン太だぜ！」

かわいらしい少女、太った少年はそれぞれ自己紹介をするが、士はただ呆然としていた。

（遊撃体メンバーがガキだけだ！？）

つまり士はワタルやアスムのこともあり、子供が変身して戦う光景を見てきたこともあるが、そこには必ず大人の導きで変化し、前へ進む少年の姿だ。だが今この場には士以外全員子供というまさかな展開。それに士は驚いているのだ。

「……大体わかった……お前らの力、少し試させてもらう」

何故かそう宣言する士。彼らを前線へとつれていって大丈夫かを判断するため、そしてこの少年少女は自分について来てくれるかの確認だ。

「門矢さん！？試すって一体……？」

スバルが少し動揺しながら士に疑問を投げ掛けるが、士は無表情のまま話を続ける。

「なあに、簡単なことさ。俺はお前らの力を知らない。それなのにこんな子供を戦場のど真中に連れて行けるか？」

「……」

士の問いに、スバルは黙ったままだ。だが的を引いているとは言え、士が成り行きで決めてしまったことなのだが。そして一回言ったことを訂正するのは彼のプライドが許さなかった。

「ユウスケ！」

「ん？どうした土？」

「ちょっと来い！」

「うわっ！？土！？」

土に強引に外へ連れ出されたユウスケは土の手を振り払い、文句を言う。

「いきなり何すんだよ！」

「いいから！」

そう言うと土はユウスケに先ほどスバルたちと話していたことを話し、協力を促す。

「はあ！？何言ってるんだお前！？」

さすがのユウスケも土の大人げの無さに驚い……

「俺に女の子と戦えって言うのか！？」

ではなくまたそれとは別の問題に異議を唱えているようであった。

【数分後……】

どうやったかは不明だが土は無理やりユウスケを黙らせ、承知させたようだ。そして今、ディケイドは牛島ゴン太が電波変換した姿、【オックス・ファイア】と対峙し、クウガは響ミソラが電波変換した姿、【ハープ・ノート】と対峙していた。

「・・・・・・・・」

スバルはただそれをじっと見つめていた。

第17話「ディケイドVSオックス・ファイア」(前書き)

タイトルと中身が前半しか合っていないっ！

・・・こちらを更新するのは久々ですね・・・

すみませんっ！！

ではっ！

第17話「ディケイドVSオックス・ファイア」

「なんかごめんなさいね？スバル君・・・」

夏海がスバルに話しかける。土のせいでややこしいことにしてしまったのを申し訳なく思っているようだ。

「気にしないで下さい、門矢さんが言っていることは間違っていないと思いますし・・・」

スバルはそう言いながら苦笑いする。

「さあ・・・どっからでも来ていいぜ？」

ディケイドは構えもせずにおックス・ファイアを挑発する。

「ホントか！？よっしゃあ！行くぜ！」

「ブロロロ！ゴン太！俺たちの力を見せてやれ！」

「オックス・タツクル！」

オックス・ファイアは突進の構えをするとそのままディケイドへ突っ込んで行く。

「そんな直線的な攻撃当たると思つか？」

ディケイドはそれをひらりとかわすと、ブッカーソード構える。こいつった相手との戦い方は、牛鬼と戦った時に大体覚えたらしい。

「セヤッ！」

攻撃を空振り、動きが鈍くなった所へ剣を降り下ろした。

「グアッ！？」

それを背中にくらったオックス・ファイアはそのまま勢い余って前方に倒れてしまう。

「そんなもんか？」

ディケイドは剣を手のひらでなぞり、いつも通りの余裕を見せる。

「くそっ！オックス・フレイム！！」

オックス・ファイアはすぐに立ち上がると、口部分から、大量の炎を吹く。

「おあ！？」

これは少し予想外だったようでディケイドは目の前の視界を炎におおわれてしまう。

「今だっ！オックス・タツクル！！」

それをチャンスとみたオックス・ファイアはディケイドに向かって再びオックス・タツクルを繰り出そうとするが、突如ディケイドを真ん中に小さな竜巻がおこったため攻撃を止めざるおえなかった。

『KAMEN RIDE・・・』

「変身っ！」

『DOUBLE!』

軽快な音楽と共にディケイドの体が、一瞬にして、仮面ライダー^{ダブル}W
そのものへと姿を変えた。

「うわっ!？」

それを見たオックス・ファイアは一瞬動きが止まってしまう。勿論
ディケイドダブル（以下Dダブル）はそれを見逃すはずがない。D
ダブルはブッカーソードで一氣にオックス・ファイアの体を切り裂
いた！

「グアアアアア!？」

「まだだぜ?」

『FORM RIDE・・・DOUBLE! LUNAX TRIGGER!』

ガードを素早くディケイドライバーに読み込ませるとDダブルの右
半分、緑色だった部分が黄色に、左半分、黒かった部分が青色に変
わり赤い複眼が輝く。そしてその手にはトリガーマグナムと呼ばれ
る青い銃が握られていた。

「休んでる暇はないぜ！」

そう言いながらDダブルはトリガーマグナムの引き金をオックス・ファイアに向けて引いた。するとどうだろうDダブルが放った弾丸はまっすぐオックス・ファイアへは向かわず様々な方向に曲がりながらオックス・ファイアへと向かっていく。

「えっ!？」

オックス・ファイアはそれをうまく避けようとするが、弾丸はオックス・ファイアから逃げ道をなくすような形で動くとそのまま吸い込まれるようにオックス・ファイアに直撃した。

「うああああ!？」

再び地面に倒れたオックス・ファイアはそのまま電波変換が解けてしまった。決着がついたのだ。

「……………これじゃあな」

Dダブルは変身を解きながら、のびているゴン太に歩み寄った。

一方ハープ・ノートとクウガはというと……

「……………やっぱ俺、君みたいな女の子と戦うのはなあ……………」

「優しいのは嬉しいんですけど戦わないと……………小野寺さん!」

この会話はデイケイドとオックス・ファイアが戦いはじめてすぐのことである。

「うーん……………」

クウガはいまだに渋っている。

「・・・確かに戦いづらいところはあるかも知れないけど戦って下さい！私達も何か力になりたいくてここへ来たんです！！このまま『戦えない』で終わるのはあんまりです！」

ハープ・ノートがクウガを必死に説得する。それは確かにクウガに届いたのか、彼は静かに頷くと構えた。

「分かった・・・戦おう！」

「行きますっ！！」

ハープ・ノートはそう宣言したと同時にクウガへと一気に接近していく。

「ショック・ノート！」

ハープ・ノートは自らが持っているギターの玄を勢い良く弾き、彼女の近くに現れた二台のスピーカーから目に見えない音の攻撃が繰り出される。

「クッ！？」

クウガはそれを右に飛んでよける。するとそこには先程こちらに向かってきていたハープ・ノートが目の前にいた。

「パルス・ソング！」

ハープ・ノートがギターの玄を弾くとまた先程とは別の音の攻撃がゼロ距離でクウガを襲う。

「超変身っ！！」

すかさずクウガは青いクウガ【クウガ ドラゴンフォーム】に変身するとその身軽さを生かして大きくジャンプしハープ・ノートの攻撃をかわした。

「え！？」

まさか避けられるとは思っていなかったハープ・ノートは驚き、動きが一瞬止まる。

クウガドラゴンフォーム（以下クウガDF）は空中で一回転して、ハープ・ノートの後方数メートルに着地した。

「危なかった……」

クウガDFは一息つくと、再びハープ・ノートに視線を戻す。ハープ・ノートは既にクウガDFをすっかりとらえている。

「マシンガン・ストリング！」

ハープ・ノートのギターから玄自体がクウガに襲いかかる。

「ッ！？」

クウガDFはそれを右に飛ぶことでかわし、つい今までクウガがいた場所の地面に玄が突き刺さった。ハープ・ノートは玄を切り、構

え直す。クウガはその地面に突き刺さっている玄を束ねて持ち直す。すると一瞬のうちにそれはクウガDF専用武器「ドラゴンロッド」へと姿を変えた。

第17話「デイケイドVSオックス・ファイア」(後書き)

ゴン太弱ええええ!?

いや・・・デイケイドが勝つのはわかるけどあつさり過ぎたる!と
かつっこまれそうな17話でした

感想待ってます!

ではっ!

第18話「クウガVSハーブ・ノート」(前書き)

どうもネクススです！

先程も地震がありましたね…

自分は先程ニコニコでツイッターの被災者へのヒーローからの応援メッセージなるものを見ていましたが、どれも心が暖まるものでしたね

天道総司や佐藤健野上良太郎など…

世界よ、これが日本のヒーローだッ！

第18話「クウガVSハーブ・ノート」

「はあああ!!」

クウガDFはドラゴンロッドをハーブ・ノートへ向かって降り下ろす。

「わあ!?!」

ハーブ・ノートもそれを避けると距離をり、ギターを構えた。

「ショック・ノート!!」

再びスピーカーから音の攻撃を発射するがやはりクウガDFには当たらずかわされてしまう。

「ウオリヤ!」

攻撃をかわしたクウガDFはそのままハーブ・ノートに接近、ドラゴンロッドでの攻撃を仕掛けた。

「ーッ!」

それを後方にジャンプして避けたハーブ・ノートは空中で更に攻撃を加える。

「マシンガンストリング!」

ハーブ・ノートはクウガに向かって弦を飛ばす。クウガDFはそれ

も避けようとするが、弦がドラゴンロッドに絡まり、奪われ、何処かへ投げ飛ばされてしまった。

「あっ・・・！」

地面を転がっていくドラゴンロッドはクウガDFが握る前の弦に戻ってしまう。

「しまっ・・・！？」

「ショック・ノート！！」

「ーッ！？」

だがハーブ・ノートはクウガを待っていることはない。武器を落とさせたことをチャンスと見て地面に着地すると同時にに攻撃を仕掛けた。

「おわっ！？」

クウガDFはうまくそれを避けると、転がっていた木の棒を手に取り再びドラゴンロッドへ変形させた。

「嘘っ！？」

ハーブ・ノートは対象の形にある程度近ければ、何でも武器になるとは思っていなかったらしく、かなり驚いた表情をした。

「ウォリヤ！」

クウガDFは大きく飛び上がるとハープ・ノートに向かってドラゴンロッドを降り下ろした！

「キャア！？」

その攻撃はしっかりハープ・ノートへ届き、ダメージを与える。

シャン！シャン！シャン！

軽快な鈴の音と共にクウガDFはドラゴンロッドを振るつ。

「ハアアア！！」

クウガDFはこれをチャンスと見て、ドラゴンロッドを構え直すと、再びハープ・ノートへ攻撃を仕掛けた。

「ッ！？」

だがそれはハープ・ノートには当たらずに空を斬ってしまう。しかしクウガDFは更に攻撃を仕掛け、ハープ・ノートを追い詰めていく。

「ほう・・・オックス・ファイアとか言うやつよりこっちの方が強いし戦闘慣れしているな・・・」

オックス・ファイアとの戦闘を終えた土がクウガとハープ・ノートの戦いを観にやって来た。

「ハハツ・・・ゴン太は電波変換し始めたのが一番最後でしたから・・・」

スバルが力なく笑う。確かにゴン太は遊撃隊の中では一番最後に電波変換を操れるようになった。だが、それでも少しは場数を踏んできたはずだ。それでも土はそんなゴン太をあっさり倒した。スバルは、土の強さに苦笑いを交えながら彼の言葉に答えていた。

「ハアッ!」

クウガDFの連続攻撃をかわし続けるハープ・ノートだが、いつまでもそうしている訳にはいかない。

シュイン・・・

突如クウガDFの前からハープ・ノートの姿が消える。

「なっ・・・!」

それを見たクウガDFは驚きから一瞬動きが止まってしまう。そして辺りをキョロキョロ見渡すが、ハープ・ノートの姿は捉える事ができない。

「ショック・ノート!」

突然クウガDFの後ろに現れたハープ・ノートはクウガDFに向か

ってショック・ノートを放つ。

「うわあああ!？」

クウガDFはそれをそれを背中でモロに受けてしまった。

「周波数を変えたのか・・・」

士はハーブ・ノートを見ながらそう呟くと、おもむろにライドブツカーを取り出す。

「門矢さん？」

その光景をスバルは不思議そうに見るが、士はそれを全く気にしないと言った様子でライドブツカーをクウガDFへ向かって投げつけた。

「ユウスケツ！」

「士!？」

クウガDFはダメージを負いながら何とかライドブツカーをキャッチするとそれをガンモードに変形させながら叫ぶ。

「超変身!!」

するとクウガDFのアーマーが青色から緑色へ変わっていく。仮面ライダークウガペガサスフォーム（PF）だ。

手に持っていたライドブッカーも彼の専用武器「ペガサスボウガン」へと変わっていた。

そして彼はゆつくりとペガサスボウガンの引き金へ指をかけると、そのまま静止した。

「・・・・・・？」

スバルはその姿をまた不思議そうに見ていたが、その理由はすぐにわかった。

「・・・・・・ッ!!そこだっ!!」

クウガPFは何もない方向へペガサスボウガンを向けると、引き金を引く。

「嘘っ!?!キヤアッ!?!」

するとどうだろう。彼ペガサスボウガンを放った先にピンポイントでハープ・ノートが現れたではないか。そして彼の放った空気の弾丸は見事にハープ・ノートへヒットし、電波変換を解除させた。

「いたたた・・・」

ハープ・ノートの電波変換が解けたミソラはクウガPFの攻撃が当たった箇所を押さえながら起き上がった。

「大丈夫？ミソラちゃん！」

スバルがすぐにミソラのもとへ向かう。

「大丈夫だよ！」

ミソラは笑顔で言うがやはり少し痛そうだ。だがグロンギー体倒せる攻撃をくらってこれですんだのなら凄いだろう。

これにて門矢新隊長の入隊試験は終了を迎えた。

第18話「クウガVSハー・ノート」(後書き)

感想待ってます！

第19話「シドウの忘れ物」

あれから数時間はただろっ・・・ゴン太はディケイドに手も足も出なかった事実を受け入れ難く思っていた。

士は戦力は少しでも必要だと思っていたため、彼も遊撃隊のメンバーには入れている。

どうやらそれが情けをかけられたと勘違いされ、若干落ち込みに加速をかけているらしい。

「門矢さん！」

「どうしたスバル？」

シドウの机に座ってうまい棒を食べていた士にスバルが話しかけた。士はスバルの問いかけに何気無く応じる。

「長官が呼んでましたよ？」

「アイツが・・・？ああ、わかった」

スバルの言葉を聞いた士はうまい棒を食べ終わると立ち上がり、適当に長官がいそうな場所を探し始めた。

「アイツって・・・」

士の傍若無人ぶりにスバルは苦笑を交えていた。

「ここか？」

今士は57階に来ていた。エレベーターから降りた彼は道なりに進んでいく。そしてそこにはやはり、士を探していた人物がいた。

「おお、門矢君。今調度君を探していたところだ」

「知ってる。スバルから聞いたからな・・・で？俺に何の用だ？」

「少し君のハンターV Gを貸してもらえないかな？」

それを聞いた士は少し予想外な要件だったため、少し驚いたがすぐに切り返した。

「ああ、いいぜ？」

そう言いながら士はハンターV Gを長官に渡す。

「何をするつもりだ？」

そんな士の話聞いてか聞かずか、彼はそのまま士のハンターV Gをある機械に繋ぎ、しばらくした後、士に返した。

「何をしたんだ？」

少し怪訝そうな顔をしながら士は長官に問うが、長官は少し笑顔になっただけで答えは言わなかったがすぐにわかった。

「お久しぶりですね、士」

「お前……！？シドウの……！？確かアシッド！」

士は自分のハンターから聞こえてきた声に驚きながら反応する。だがアシッドは淡々と言葉を返す。

「シドウとワタシが二人で決めました。ただ病院にいただけではなくあなたたちの役に少しでも立ちたいと言っシドウの気持ちをワタシは受け取って来ました」

「……成る程な、だいたい分かった」

そっついながら士はハンターを懐にしまい、長官を見る。

「とりあえず受け取るものは受け取っただろ？もういいか？」

相変わらずの士の上下関係もへったくれもない対応に彼は苦笑を交えながら、もう用は済んだことを伝え、それを聞いた士も、再び彼の持ち場に戻って行った。

「ここは・・・？」

今スバルは先程まで自分がいた場所とはまったく違う場所にいた。いきなり灰色のオーロラが彼を通過して行っただけと思ったら、見慣れない土地に一人で立っていたのだ。当たり前だが困惑している。

「ーッ！？」

そして目の前に再び灰色のオーロラが現れたと思うと、そこから薄茶色のコートと、同じ色の帽子をかぶった中年くらいの男性が立っていた。

「私は鳴滝。いま君のいる世界に破壊者が紛れ込んでいる」

「ッ！？鳴滝って・・・！！」

その名前を聞いた瞬間、土から聴いた話の中に、その名前が入っていたことを思い出す。彼はディケイドを世界の破壊者だの悪魔だの言って、たびたび土の旅を邪魔してきた人物。そう聞いている。

「破壊者って・・・門矢さんのことですか？」

「その通りだ」

「だけど門矢さんはもう破壊者の役割を終えたんじゃないんですか！？」

スバルは鳴滝にこえを荒げながら言う。だが鳴滝はあくまで淡々と言葉を返した。

「そんなことはない。奴は破壊者だ。それはいつになっても変わらない。私はこの世界を救いたいのだよ」

この言葉は半分本音で半分嘘と言ったところだろう。なぜなら以前彼は、この世界を《破壊するべき世界》だといったからだ。だが、ディケイドのことは今でも世界を破壊する悪魔だと思っているのだろう。

だがスバルはすでに土を、ディケイドを信じると決めている。決して鳴滝の言葉を呑んだりはしないだろう。

「僕は門矢さんを信じている！！あなたの脅しには屈しない！」

それを聞いた鳴滝はそのセリフをあざ笑うかのように再びオーロラを出現させた。

「ならば仕方ない・・・ここが君の死に場所だ！」

今度はどこかの水辺に飛ばされたスバルの前に、異世界の仮面ライダーグレイブと、残留電波から作られたイエティ・ブリザードの二体が出現する。

「・・・ウォーロック・・・行くよ！」

「おう！」

「トランスコード003！シューティング・スターロックマン！」

第19話「シドウの忘れ物」(後書き)

シドウの忘れ物はアシッドのことでした！

感想待ってます！！

第20話「孤独な戦い」

「門矢さん！スバル君見ませんでした？」

ミソラが土に話しかける。質問の内容からしてスバルを探しているのだろう。

「さっきあそこで見かけたが……いなかったのか？」

「はい……そこらじゅう探しても見つからないんです」

「それはおかしいな……」

土はミソラの話から、おかしいあることに気づく。

先程土はスバルとWAXAの中で話したため、いないと言うのは考えづらい。そして中にいたのならこの大きさの建物で一人も見かけなかったというのは少しおかしい。探しても見つからないということは、隠れてもいない限り探しても見つからないということとはなかなかない。

そう考えると、スバルが何か別の場所に瞬間的に移動したとか思えなくなる。そして土にはそのことに心当たりがあった。

「（まさか……次元のオーロラか……！？いったい誰が……いや奴にきまつてるか……）」

「門矢さん？」

一人で考え込んでいた士に不思議に思ったのかミソラが尋ねる。

「いいや、何でもない、大丈夫だぜ」

士はミソラにとりあえず隠してもし自分が考えていたことが本当だとしたらどうスバルを助けるべきかを悩んでいた。

「ロックバスター！」

ロックマンはイエティ・ブリザードへ向かってロックバスターを放つ。

「ーッ!？」

それはイエティ・ブリザードに直撃し、ダメージを与える。が

「ハアッ!！」

ロックマンがイエティ・ブリザードと交戦している間にグレイブがロックマンへ近付き、グレイブラウザーで斬りかかる。

「くっ!?!うわぁ!?!？」

その攻撃はバスターを構えていたロックマンに直撃して、後ずさる。

「バトルカード！ロングソード！！」

ロックマンはグレイブとの近距離戦闘に対応すべく自らの右手を剣へと変化させた。

「行くぞっ！ハアアアア！！」

そして彼はロングソードを使い、グレイブと激しい攻防を繰り広げ始めた。

ギイン！ガキイン！

だがグレイブばかりに気をとられていられない。イエティ・ブリザードもその大きな拳を振り上げ、ロックマンに攻撃を仕掛けようとする。

「くっ！？」

「ウラア！ビーストスイング！！」

イエティ・ブリザードの目の前に突然ウォーロックが現れ、自らの爪でイエティ・ブリザードを切り裂いた。

「ロック！助かったよ！」

「ヘッ！てめえ一人じゃ不甲斐ないからな！」

「フフッ！頼りにしてるよ！」

「おうつー!!」

ロックマンとウォーロックは互いに少し笑みを浮かべると、敵に向かい合った。

「ソードファイター！ヤアアアア！！」

そしてロックマンはロングソードとは形状が違う剣を装備すると、グレイブに斬りかかる。

「グッ！？」

先程よりも早い太刀筋にグレイブは押されぎみになっている。このまま行けばロックマンの勝ちだろう。

だが人生そうなかなかうまく行かないものである。

「うわああああっ！？」

グレイブに追い討ちをかけようとしたロックマンに何者かの攻撃が襲い、攻撃することが叶わなかった。

「スバルッ！！」

ウォーロックも急いでロックマンの下へ向かう。

「いったい何が……」

ロックマンは立ち上がりながら攻撃が来た方向を見た。そこには黒い体に鎧のような仮面から赤色の複眼が輝いている仮面ライダー。【仮面ライダーリユウガ】が立っていた。

「チッ！新手かよ・・・どうしてもアイツは俺達を倒したいらしいな・・・！」

ウォーロックも舌打ちしながらスバルに言う。これで数は3対1。圧倒的にスバルが不利だ。

『『ATTACK RIDE・・・BLAST!』』

突然流れた電子音と共に赤色の弾丸と、青色の弾丸が、グレイブとイエティ・ブリザード、そしてリユウガを襲う。

「「何っ！？ぐわあああ！？」」

「・・・今のは！？門矢さん！？どうしてここに！？」

「ああ・・・ちょっとこいつを釣ってな」

「そんな言い方はないんじゃないかな士！僕はお宝を取り返しに来ただけさ、異世界にあるんじゃないやエースPGMの真の力は拝めないしね」

「まっそついうこつた、俺も加勢するぜ！」

そう言いながらディケイドはブッカーソード片手にグレイブへと走り出した。

「ハアアアア！」

「グッ!？」

思いがけない新手にグレイブは戸惑いながら応戦するが、そんな状態で迎え撃てるほどディケイドは甘くない。

「セヤッ!！」

「グワアアッ!！？」

ディケイドの一閃がグレイブをとらえる。グレイブは衝撃に耐えきれず、ガードを開いてしまった。

「ハアッ!！」

これをチャンスと見たディケイドは一気にブッカーソードでグレイブを斬りつけていく。

「ガアアアア!？」

ディケイドの連続攻撃をくらったグレイブは、数メートル後方に勢い任せに吹き飛んで行く。

「バトルカード! プラズマガンX!！」

ロックマンもイエティ・ブリザードへ向かってノイズの力で強化されているバトルカードを使い、攻撃する。

イエティ・ブリザードの属性の弱点を突いたロックマンの攻撃は

イエティ・ブリザードに大ダメージ、更に麻痺の効果で一時的にイエティ・ブリザードの動きを封じる。そしてロックマンは続けてバトルカードを読み込む。

「ソード！ワイドソード！ロングソード！ギャラクシーアドバンス！ジャイアントアックス！！！」

ロックマンの両手が突然光だし、一つの巨大な斧となる。これは特定のバトルカードを特定の順番で読み込ませることにより、一つの超強力なバトルカードに変化させる、【ギャラクシーアドバンス】である。

「はあああああ！！！」

そしてロックマンはジャイアントアックスをイエティ・ブリザードへ振り下ろした！

第21話「姉弟（きょうだい）」

ロックマンの放った渾身の一撃がイエティ・ブリザードに直撃する。

『FINAL ATTACK RIDE・・・』

『DE DE DE DECADE!』

『DI DI DI DI END!』

それに呼応するかの様にディケイドとディエンドは自身の必殺技を発動させ、それをグレイブとリュウガへ向かって放った。

「ハアアア・・・テヤアアア!!」

「ハアッ!!」

「ガアアアアア!!?」

攻撃をともに受けた二人は爆発と共に跡形もなく消えてしまう。

「これで片付いたな」

「門矢さん、助かりました!」

「なに、お前があの世界にいないと色々まずいからな」

「・・・?それってどういう・・・」

「兎に角帰るぞ？お前の彼女も心配してるからなあ」

「かつ！？彼女！？」

突然のディケイドの変身を解きながらの言葉に激しく動揺しながら反応するスバル。士はその反応を完全に楽しんでいた。

「門矢さん！？いったい誰のことを言ってるんですか！？」

「さあな・・・？どつかのアイドルかもしれないぜ？」

士がここぞと言わんばかりにスバルをちゃかしまくっていたが、そこに海東が口を挟む。

「士、遊んでないで帰るよ！僕だって暇じゃないんだから」

「わあったわあった！ほらスバル、行くぞ」

海東の言葉にかなりテキトーに返事を返す士。それに対して彼は不機嫌そうに灰色のオーロラを出現させそれを潜っていく。そして士たちも、その後続いた。

その光景を見ていた鳴滝はただ士を物凄い形相で睨みつけながら呟く。

「おのれディケイド・・・！」

勿論士達がそれを知るわけもなく、オーロラを潜り抜け、WAX Aの前に立っていた。

「帰ってきたな」

「はい」

「なら取り合えず仲間に顔を見せて来い・・・探してたぜ？」

「分かりました！」

そう言いながら士はWAXAの中に入っていく、スバルもそれに続く。その後士は夏海たちに、スバルはミソラたちに迎えられた。

「それで帰る時に門矢さんが急に言ったんだよ・・・びっくりしちゃったよ」

「え・・・？それって・・・」

スバルはミソラに士にからかわれてしまった事を話していた。スバルは、士が誰のことを言っているのかわからないと言った表情をするが、スバルにアイドルの知り合いなど多いはずがない。てか普通多くない。そして士が知っている人物で該当する人物は一人しかいなかったりする。それに気づいたミソラは頬を赤く染めた。

「・・・？どうしたのミソラちゃん」

「ッ！？うつん、何でもないよ？」

まったくもって気付いていないスバルに心の中でため息をつくミソラ。この友達以上恋人未満を体現したかのような関係が変わるとしても、かなり先になりそうだ。と言ってもスバルが今のままでは

その望みはかなり薄いが・・・。

一方士は、長官の許可を得て、ある場所へ向かっていた。士がついたのは収容所のような場所だ。そしてその先にあるある部屋の前で足を止めた。

「ここか・・・」

士はかなり簡素で脱獄など簡単そうな部屋の前に立っていた。その部屋の近くの台にハンターをかざすとドアが開く。そこはドアが内側から開かないこと意外は普通の部屋だ。

「・・・ッ!?」

中にいた清楚だが冷たい目付きをする女性と、黒髪ツンツン頭で目付きの悪い少年はいきなり士が入ってきたことに対してかなり驚いた表情をした。

「あんた誰だ？」

少年は士に警戒しながら質問するが、士はそれを気にしていないと言った様子で質問する。

「単刀直入に言う・・・俺やスバル達と一緒に戦ってくれ」

「ハア!?」

少年、ジャックは自分の質問を無視した士を驚きながらも睨みつけた。

「・・・それはあなたが何者か次第だわ・・・」

女性、クインティアはジャックをなだめながら士を睨みつける。
いきなり見ず知らずの人間にそんなことを言われても信用できる筈がない

「・・・分かった」

士もそれを察したのか、素直に話し出した。

「俺はサテラポリス遊撃隊の現隊長、門矢士だ」

「ッ！？ディーラとの戦いのあと解散したんじゃ！？」

ジャックは士の話聞いた瞬間心底驚いたような表情をする。クインティアも、彼ほどの反応ではないがかなり驚いたようで目を見開いている

「新しい適が現れた・・・正直今の戦力じゃ少し不足気味なんだ。相手の戦力はまだ未知数だがかなり多いと考えていいだろう」

「・・・」

二人はその話をただ黙って聞いていた。

「だが俺達は・・・」

「お前たちが何をしたかは知ってる・・・その上で訊いてんだ」

「だけど私たちはもう電波変換は出来ないわ・・・正直今の私達で戦

力になるかどうか・・・」

「それなら問題ない・・・さあ、どうする？」

士の少し挑発的な言い方にジャックはすぐに反応する。

「い・・・いいぜ！やってやる！-！」

「ハア・・・良いわ、ここにずっといるよりよりスバル君やシドウ達の役に立つほうがよっぽどいいから」

「よし、交渉成立だな、詳しいことはWAXAに戻ってから話してやるから」

そう言いながら士はジャックとクインティアを連れてWAXAへ戻っていった。

第21話「姉弟（きょうだい）」（後書き）

感想待ってます!!

第22話「二人のウィザード」(前書き)

・・・とりあえずすみませんでした。

第22話「二人のウィザード」

士はジャックとクインティアを連れてWAXAへと戻り、ヨイリ博士の元へ向かう。

正直士はヨイリー博士と呼ばれる人物が苦手だった。彼がここへ来たばかりのころは仮面ライダーと言う未知の技術を持った彼に必要以上に話しかけて来たからだ。そして何より

「来たわね、士ちゃん」

彼はこの呼ばれ方が一番気に入らないのだ。

「その呼び方はやめろ！・・・ハア・・・まあいいや。約束通り連れてきたぜ？」

そう言いながら士は二人を一步前に出させる。

「そうね、はい、これが二人のハンターVGよ」

ヨイリーはそう言ってハンターを二人に渡す。二人は少し怪訝そうな顔をしながらもそれを受け取った。すると唐突にハンターからウィザードが現れる。コーヴァスとヴァルゴだ。

「よう！久しぶりだな！ああ！？なんだそのふ抜けた顔は！？」

「キャハハハ！すっかり毒気抜かれちゃったみたいだね！」

「ッ！？」

「お前!？」

2体のウィザードの登場に激しく動揺する二人。何故あの時デリートされた筈の2体がここに平然といるのだろうか？その答えを教えたのはヨイリー博士。

「私が再構築したのよ」

サラツと言うが一回消えてしまったデータをバックアップも無しに再構築するなどと言うことはかなり難しかったりする。だが今回はディケイドと戦った残留電波から必要なものをできる限り集めた用なので、いくぶんかは楽になったようだ。

「だが、こいつらが俺たちに協力する保証は・・・」

納得しきれないといった表情をしながらジャックは不安要素を上げる。それはそうだ。コーヴァスとヴァルゴは凶悪な電波体で、故郷であるFM星から追放された過去を持ち、地球にも牙を向いたことがある。そんな危険な奴を何故再構築などしたのだろうか？

「それなら少し細工を加えておいたから大丈夫よ」

「細工・・・？」

ヨイリーの言葉にクインティアは思わず聞き返してしまう。

「ええ、ちよつとした・・・ね？」

「少し気にくわねえがそう言うことだな。そんな訳で俺たちにお前

らを裏切る意思はない。第一裏切るつもりならとつくにやっ
てもんだろ？」

「……」

コーヴァスの言葉に思わず二人は押し黙ってしまう。確かにこの
2体だったら再構築が終わった直後にここを破壊し、逃げ出して
ることだろう。それが無いということはやはりヨイリー曰く細工と
やらが確り機能し、2体を押さえつけているということだろうか？
どうやってもわからないため、二人は思考を中断した。

「そんなわけだ。まあ最低限の生活の保障はここがするって話だか
らな」

士がそんなことを言いながら部屋を後にしようとするが、ジャッ
クに止められてしまう。

「おい！ちょっと待ってくれ！暁のやつはどうしたんだ？まさか怪
我で引退しましたってことはねえんだろ？」

ジャックたちは牢獄の中にいながらも、暁シドウの生存の情報を
入っていた。だがそれ以降の情報は入っていない。そのためにでた
疑問だ。その問いに対して士はただついて来いだけ伝え、この場
所を後にした。

「医務室？」

土につれてこられた場所は薬品のおいが充満する施設の一角。どうしてそんな場所につれてこられたのかとジャックは一瞬思考が停止する。なぜこのような場所なのか？だがすぐに答えを導き出せないほど彼も馬鹿ではない。

「まさか、アイツあのかきで？」

「いや、シドウは一回前線に戻ったが」

「やはり私との電波変換には少々無理があつたようです」

「アジット！？」

土の言葉を、彼のハンターから出てきたアジットが続ける。シドウのウィザードであるアジットが彼のハンターから出てきたことにジャックは驚く。

「本当にそれだけ？それだけだったらここまでなることはないんじゃない？」

今まで沈黙を貫いてきたクインディアが口をあける。確かに今から入ろうとしているドアの先は少し普通とは違う雰囲気をかもし出している。

「そう言つては自分で確かめてみるこつた」

そう言いながら土は部屋の前から立ち去っていく。

「お・・・おい!どこいくんだよ」

「シドウが今どういう状況かは自分たちで確かめな」

彼はそう言うと、今度こそ彼らの視界から消えた。まるで逃げるように・・・

「チッあんな意味深なこと言われたら入りずらくなっちまうじゃねえか」

ジャックは毒づくが、そんなことをしている間にいを決してしまったクインティアがドアノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開ける。

「・・・ッ!？」

白いベッドに横になっているシドウには点滴がいくつかうたれていて、掛け布団で目には映らないが包帯も巻いていることだろう。目をつぶっていたため一瞬意識がないかと思ってしまったが、近づいて見ると単に寝ているだけのようだ。そのことに気付くと少しほっとする二人。

「シドウ・・・」

クインティアは優しく呟くと、シドウの頬に手をあてる。

「あなたはまた一人でこんなになるまで・・・」

ジャックは姉の背中が見ていらなくなったのか、気づけば部屋を出ていた。それは彼なりの気遣いだったのかもしれない・・・。

第22話「二人のウィザード」(後書き)

感想待ってます!!

第23話「Mr・キング」(前書き)

どうも大変長らくお待たせいたしました！

え？遅すぎる？

…ゴメンナサイ……

第23話「Mr・キング」

「変身！」

『KAMEN RIDE・・・DECADE!』

WAXAの前で防衛戦を開始するサテラポリス遊撃隊。理由は言うまでもなく攻撃を仕掛けられたからだ。

「ちっ数が多いな」

ディケイドはそう言いながらブッカーソードを構える。

「なんだ？弱音かよ」

少し小バカにしたような口調がディケイドの愚痴を遮った。それはロックマンではない。ジャック・コーヴァスと呼ばれる電波人間だ。

「さあな」

ディケイドはジャック・コーヴァスの言葉を無視すると、実体化したウイルスや怪人の群れへ単身突っ込んでいく。

「ハアアア！」

ブッカーソードで次々と敵を倒していくディケイド。ロックマンやジャック・コーヴァスたちもそれに続き、敵の大群へ攻撃を開始した。

「ヤアッ！」

ロックマンの剣がウィルスを切り裂く。ディケイドの剣が怪人を切り裂く。クウガの拳が怪人を沈める。ジャック・コーヴァスの炎がウィルスを焼ききる。ハーブ・ノートの音波がウィルスを蹴散らす。クイーン・ヴァルゴの水流がウィルスを飲み込む。オックス・ファイアの炎がウィルスを燃やす。

サテラポリス遊撃隊の活躍で確実に敵が減っていく。だが突然空が暗くなる。何か巨大なものが空を遮ったのだ。

「んな・・・！？」

それを見たジャック・コーヴァスは驚愕を露にする。ただ相手が巨大だったからと言う単純な理由でない。ここにいるはずのない存在だったからだ。

「クリムゾン・ドラゴン！！？」

ロックマンが信じられない様に声を張り上げる。メテオGはあの時完璧に破壊したはずだ。クリムゾンの一つだって残っているかどうか解らないくらいの勢いで爆発したはずだ。それは爆発に巻き込まれた自分が一番よくわかっていて。なのにだ。味方が巻き沿いになるのもお構い無しに暴れられるほど奴はぴんぴんしている。それにあれはメテオGそのものだったはず、メテオGから離れられない筈だ。

「おいおい・・・あんなのアリかよ！？」

ディケイドはクリムゾン・ドラゴンの攻撃を紙一重でかわしながら愚痴を溢す。彼は一通りこの世界での出来事を調べてきている。実際にクリムゾン・ドラゴンを見たことあるのはロックマンだけであるが、今はそれは関係ない。何故奴がここにいるのかを突き止めるのが先だが、クリムゾン・ドラゴンの攻撃がそれをさせない。

「くそつたれが!？」

ノイズの羽を飛ばたかせて空を飛ぶクリムゾン・ドラゴンに対してディケイドはライドブツカーガンモードで牽制するが、あまり効果があるようには見えない。

「ふん!世界の破壊者が!私自らが消し去ってやろう!」

「なっ!？」

「その声は・・・」

クリムゾン・ドラゴンの発した声にロックマンたちは思わず驚いてしまう。二度と聞くはずのない声のはずだからだ。あの時メテオGと、クリムゾン・ドラゴンと共に消滅したはずの存在。それは・

「「Mr・キング!？」」

ロックマンたちは信じられない様子で叫ぶ。ディケイドもWAXAの資料で彼の資料には目を通したことがあったので仮面の下で眉をひそめる。

「スバルが最後に戦ったって奴か・・・」

ディケイドはそこで一呼吸置くと、更に続ける。

「で？そいつが俺に何の用だ？」

「そんなことわざわざ言わずとも分かるであろう！破壊者よ！」

クリムゾン・ドラゴンはディケイドの問いに嘲笑うかのように答える。

「そうか・・・そう言うことが！何でてめえが生きてるのかやっと分かったぜ！」

ディケイドは何か気付いたように声を張り上げた。

「今日は挨拶程度だ！私のショーをゆっくり楽しみたまえ！」

そう言うと、クリムゾン・ドラゴンは何処かへ飛びさってしまった。

「待てっ！！クッ！？」

それを追おうとするディケイドだったが未だに残っている怪人やウィルスに阻まれ、追跡を断念せざるをえない。

「邪魔だ！」

ブッカーソードで怪人達を斬りつけるディケイド。その頃にはクリムゾン・ドラゴンは視界から消えてしまっていた。

「クソッ！」

舌打ちをしながら彼は八つ当たりをするかのように手当たり次第に敵をライドブツカーで攻撃し始める。

『FINAL ATTACK RIDE・・・DE DE DE
DECADE!』

「ハアアアアア!!」

ディケイドの攻撃で敵の数は一気に減っていく。他の見方もそれを好機と見たのか、自分の持つ最強の技を放っていく。結果、あれだけいた怪人とウィルスは一匹残らずいなくなり、大きな爆発音の後、辺りを不思議な静けさが覆った。

第23話「Mr・キング」（後書き）

死んだ筈のMr・キング。果たして彼は何故生きているのか!?

スバル「何ちよっとかっこよく締めようとしてんの?」

だめ?

スバル「だめ」

何で?

スバル「作者がバカだら」

………うっさい鈍感帝王

スバル「?どどういうこと?」

フッフッフッ…

スバル「教えろおおお!!」

クロックアップ!

スバル「何っ!?!消えた!?!」

勝った!!

第24話「襲撃」

WAXAのある一室。そこにスバルや土をはじめとした、サテラボリスのメンバーが集まっていた。

「つまり・・・君の推測が正しければ、あのMr・キングは別の世界からやって来たと・・・」

「おそろくな」

長官の確認に土はそっけない態度で返す。

死んだはずのMr・キングが生きていた。その理由として土が考へ出した答え。それが別の世界のMr・キング。様々な世界を巡っている彼だからこそたどり着いた答えだ。そして別の世界からの侵略となると、間違いなく鳴滝が一枚絡んでいるだろうと土は考えている。

「それで・・・あのMr・キングはどんな世界から来たんですか？」

スバルがある疑問を投げかける。彼は一度ラ・ムーを倒した後、もしもロックマンがラ・ムーに敗れていたら？という異世界。つまりパラレルワールドに足を踏み入れたことがある。そのときはアポロン・フレームというムーの電波体を倒したためもとの世界に帰ることが出来た。

つまりだ、スバルは自分が敗北してしまった絶望的な世界からさらに支配の幅を広めようとこの世界にまでMr・キングが攻めてきたという予想が頭をよぎった。もしそうなら別の世界のこととは

いえ、自分が敗北してしまったことから始まったことだ・・決着を付けるのも自分だ他の人を巻き込みたくはない。

「さあな?・・・流石にそれまではわかんねえよ」

スバルの問いにもそっけなく答える土。だが嘘はついていない。流石の土もどこから来たかなど一度会っただけで分かるはずがない。

「まあ・・・少なくともあまり喜ばしいことじゃねえな」

ジャックがため息混じりに言う。そもそも彼はMr・キングが大嫌いだ。自分の結友人を当たり前のように使い捨てにし、自分も目的のために相当の我慢を強いてきた。

「・・・そうね」

クインティアもジャックの言うことに肯定する。

「とにかく相手の居場所と目的が分からないんじゃない下手に動けないな」

土はそう言いながら面倒と言わんばかりに席を立つ。だが次の瞬間部屋のモニターにいきなり映像が映し出される。しかもそこには忌々しくもMr・キングが写し出されていた。

「――ッ!?」

突然のことに驚く一同。だが当のMr・キングは何食わぬ顔で回りを見る。

「何・・別にそこまで驚くことはないだろう。以前も似たようなことをしたではないか」

彼は嘲笑うかのような口調で話し出す。口調といい表情といい人を見下し、馬鹿にしているとしか思えない。

「デメエ・・何の用だ」

ジャックがモニターに映るMr・キングを睨み付ける。

「なに、ささやかな勝利宣言だよ」

「ふざけんな!!」

彼の言葉にジャックは怒鳴り散らす。当たり前だ。返答が返答だったのだから。だが彼は表情を崩さない。自分が言ったことは間違いいでは無いと言う様に・・・

「で?そのカッコいい勝利宣言の自信は何処から来るんだ?」

激昂したジャックでは話が出来なかった土は口を開く。挑発も混ぜて。

「フツ・・なんなら見てみるといい・・この私の力を!」

彼がそう言った瞬間WAXAのあちこちから警報が鳴り出す。

「——ッ!?」

「滑稽だな・・まさか私が何の策も無しにあの大軍を送り込んだと

思っていたのか？」

職員達が慌ただしく動く中、その言葉を聞いた人間は一瞬動きを止めてしまった。

「なに？」

「チツ！？そう言うことかよ！？スバル！電波変換だ！恐らく何処かの電腦にこの騒ぎを起こしてる何かがいるはずだ！」

「はい！」

「何かってなんだよ！？」

「俺が知るか！？そう言うのはお前らの方が詳しいだろ！」

「ジャック！今は無駄口を叩いてる暇はないわ！最悪ここが完全に機能を失うか乗っ取られるわ！」

クインティアの言葉に再び彼らに緊張が走る。自分たちの拠点が潰される。それだけはなんとしても阻止しなければならない。

「トランスコード！！」「」

電波変換出来る全員が電波の世界。仮面ライダーには入り込めない舞台へと、彼らは足を早めた。

「ユウスケ！俺たちは外から探すぞ」

「外からって・・・」

「パソコン位いじれんだろ！」

「ああ！そう言うことか！」

ユウスケの気の抜けた反応に土は若干苛立ちを覚えながら適当に画面の前に座り、ハンターを取り出す。

「アシッド！頼むぞ！」

「任せてください！」

土はすばやくハンターを目の前のパソコンにつなごうとするが、そこでその手が止まる。

「だめだ・・・もうここまでやられてんのか！？」

手が止まった理由。それはすでにこちらから何かを送ることも、あちらから何かが送られてくるとも出来ない状態になってしまっていた。いくらなんでも進行が早すぎる。これではスバルたちの援護をすることが出来ない。

「くそっ！マジかよ！？」

ダンッ！と土は机をおもいつき叩く。こんなことは初めてだった。仲間が必死に戦っているというのにそれに加わることが出来ずにただ待っていることしか出来ないなんて。

「土・・・」

「どうした？」

突如ハンターの中からアシッドが現れる。

「一つだけ彼らの元へ向かう方法があります」

「？」

アシッドから告げられる一言・・・それは。

「私との電波変換です」

第24話「襲撃」(後書き)

感想待ってます！

第25話「それぞれの戦い」(前書き)

超久々に連日投稿

第25話「それぞれの戦い」

「俺が・・・お前と電波変換だと？」

士は怪訝そうに眉を潜める。確か電波変換は周波数がほぼ同じ者同士しかできなかったはずだ。アシッドにとってそれは暁シドウ。士ではない。

「私には貴方のハンターに入る前に少し改良が加えられました」

アシッドは冷静に言う。改良とはおそらく士でも電波変換できるようにしたことだろう。

「ですが・・・私との電波変換は知つての通りリスクを伴います」

アシッドは言うが、その程度で士の今下していた決断は揺るぎはない。

「は？この俺を誰だと思ってんだ？」

「フツ・・・そうでしたね」

この期に及んでも軽口を放つ士。こういったところがシドウと似たり寄ったりしているのかもしれない。

「おっし！ユウスケ！ここは任せた！」

「え？ちよっ！？士！？」

士は困惑しているユウスケを尻目にハンターを見据える。

「行くぜ？」

「いつでもっ！」

「トランスコード001！アシッド・エース！」

そう叫ぶと同時に彼は電波の世界へと足を踏み入れた。

「士・・・」

誰もいない、警報だけが鳴り響く部屋でユウスケは目の前の画面を見つめていた。

「ロックバスター！」

ロックマンはある電脳の中にいたウイルスを全滅させる。ここにはウイルスしかいなかった。と、するとここはハズレだ。すぐさま彼は別の場所と同じように戦っている仲間へと連絡を入れる。

「ジャック！」

「んだよ！？」

彼の耳には相手の声だけでなくほかの雑音もひっきりなしに聞こ

える。戦っている最中なのだろう。

「そっちはどう?」

「さあな!? 多分ここじゃねえと思うがウイルスが多すぎて思うようにうごけねえ!」

通信の相手はジャック・コーヴァス。がどうやらあまり状況はよくはないようだ。今でも爆発音は途切れることなく聞こえてくる。

「悪いが一回通信切るぜ!」

相当忙しかったのか、ロックマンが何かを言う前に一方的に通信を切ってしまう。

そして気づいたところには一掃したと思っていたウイルスは再び現れていた。

「・・・きりがいい・・・」

「まったくだ」

ロックマンはウォーロックとそんなことを話しながら再びロックバスターを構えた。

「ハアアアア!!」

「……マジかよ」

一通りウイルスを駆除したジャック・コーヴァスはその先でクイン・ヴァルゴと鉢合わせし、ある場所へ向かった。そこにいたのは……

劣化型、残留電波ではあるもののそれは間違いなく……

「シリウス……」

ある意味ではクリムゾン・ドラゴンよりも恐ろしい存在か姉弟の前に立ちふさがっていた。だがそんなものがここにいたということは間違いなくここに何かあるということだ。

「やるわよ……ジャック」

「当然だ！スバルたちが来る前に片付けようぜ！」

姉弟は強大な相手に向かって一歩踏み出した。

「……」

だがその瞬間シリウスから放たれる兄弟なレーザーが二人を襲う。彼らはそれを左右両方に散ることかわし、ジャック・コーヴァスはそのまま攻撃を加える

「エアロダイブ！」

ジャック・コーヴァスが攻撃を加えようとした瞬間薄い電波障壁のようなものが浮かび上がる。それは彼の一撃でその電波障壁は粉々に砕け散るが、彼の攻撃は中断。そしてすぐに電波障壁は新しいものが作成された。

「クソッ代わりはいくらでもきくつてか!？」

「ジャック!危ない!」

「ーッ!？」

クイン・ヴァルゴの言葉に反応し、シリウスがいる方向を見ると自分に向かって再び攻撃が仕掛けられていた。彼はとっさに翼を羽ばたかせるがこのタイミングでは避けるのは難しい。

「マシンガン・ストリング!」

突如白い弦が彼の腕に巻きつき、引っ張ることで、強引にレーザーの軌道からそれる。

「おわっ!？」

ジャック・コーヴァスは焦りながらもどうにか弦が飛んで来た方向を見る。そこにはハーブ・ノートが立っていた。

「ジャック!クインティア先生!私も助太刀するわ!」

「ミソラちゃん!？」

「気をつけろよ・・・こいつ残留電波だからってなめてかかるとやられる」

三人は再びシリウスに対峙する。その場所へ向かうロックマンとアシッド・エース。この二人の到着はこの事態をどう打開できるのか？

第26話「vsシリウス」(前書き)

今回はちょっと短めです！

第26話「vsシリウス」

ロックマンは見た。かつてFM星を自らのサーバーに吸い込もうとした電波体を。彼は見たその眼前に倒れて、必死に起き上がろうとする自分の仲間を。そしてその仲間に向かって止めを刺そうとするシリウスの姿を。

「・・・やめろおおおおお!!」

それを見たロックマンは声を張り上げながら一心不乱にシリウスへ向かっていく。

「ジャイアントアックス!」

生半可なバトルカードでは奴には通用しない。そう判断したロックマンは強力なバトルカードを直ぐ様読み込み、シリウスへ突っ込んだ。

その攻撃はシリウスへ届くことなく防がれてしまうが、シリウスの注意をこちらに向けることには成功する。

「お前の相手は僕がやってやる!」

「チッ!とんでもねえ奴の残留電波まで持ってやがるな・・・どっから持って来たんだか・・・」

ウォーロックは忌々しげに呟くが、そんなことをしていても敵はいなくならない。それは重々承知していることなのだが愚痴らずにはいられなかった。

そんなことをしているうちにシリウスからは反撃がやって来る。
ロックマンはそれをうまくかわしながらロックバスターを放つ。が、
余り効果があるようには思えない。

「クツ・・・！」

ロックマンは苦い顔をしながら一旦シリウスから距離をおく。やはり薄い壁が常時展開されるなら破壊し、復活するまでの間に再び攻撃を仕掛けるしかない。

「バトルカード！ガトリングー！」

ロックマンはすぐさま連射できるバトルカードを読み込むと、それを素早くシリウスへ向けて放った。

攻撃こそ通ったもののダメージがあるようには思えない。

「くそがつ・・・せめてファイナライズができれば・・・」

ウォーロックが悔しそうに呟く。エースPGM自体は今スバルのハンターの中に入っている。だがアクセスする場所を自らの手で破壊してしまっている。所詮、叶わぬ願いだ。

だがその瞬間ロックマンはあることに気づく。

「ちょっと待って・・・クリムゾン・ドラゴンはメテオGそのもの、
だったらあの異世界のクリムゾン・ドラゴンにもアクセスできるかも！？」

つまりだ。クリムゾン・ドラゴンとはメテオGの核。メテオGとクリムゾン・ドラゴンはほぼ同義の存在だと言うことだ。この仮説が正しいならクリムゾン・ドラゴンにもメテオサーバーがあり、ノイズが溜まればアクセスできるはずだ。

その結論に至った彼は早速メテオサーバーへのアクセスを試みる。

『流星サーバー…アクセス』

久しく聞いていなかった電子音がロックマンの耳に届く。アクセスに成功した。

「よしっ！行くよロック！」

「ああ！」

「ファイナライズッ！！」

ロックマンの身体を赤黒いノイズが覆い被さっていく。中で彼の最強の姿が形作られているはずだった。

パシユッ・・・そんな気の抜けた音と共にロックマンを覆っていたノイズが崩れ落ちる。

「なっ・・・！？」

「アクセスが拒否された！？」

中から現れたのは先程と何も変わらないロックマン。だが彼に驚いている時間はない。シリウスの攻撃が今にもこちらに迫って来て

いるからだ。

「くそっ!？」

避けられるタイミングではない。そう判断したロックマンは素早くバリアを展開し、シリウスの攻撃に備えた。

ゴウッ! 直後轟音と共にバリアごとロックマンをシリウスの攻撃が呑み込んでいく。

「くっ・・・!」

バリアにはみるみる内に亀裂が入っていく。壊れるのは時間の問題だ。

「踏ん張れ・・・スバル!」

ウォーロックの声が聞こえる。だが無常にも亀裂は広がっていく一方だ。ここままでは本当に危ない。

「やべえぞ・・・!」

そんなことは言われなくても分かっている。ロックマンは次のバトルカードを読み込もうとした瞬間それは起きた。

「ウイングブレードッ!!」

叫び声と共に何かがものすごい勢いでシリウスへ向かっていく。彼はその攻撃を、その姿を知っている。

「あれは・・・」

「おいおいマジかよ・・・」

「アシッド・エース!?!」

サテラポリスのエースの姿を借りた世界の破壊者はそのまま敵の懐へと向かっていった。

第27話「復活のアシッド・エース」(前書き)

や……ヤバい……短すぎる……

スバル「やゝい駄文作者」

ガキっぽ!?

スバル「小学生だけど」

……

士「まあこんだけ時間かつといてこれだからな…流口クEXEの
こともあるし、しばらく新作に逃げてたしな」

反論する余地也没有せん…

第27話「復活のアシッド・エース」

「暁・・・さん？」

ロックマンは信じられない物を見るかのように目の前の光景を見る。シドゥは今も病院で寝ているはずだし、アシッドも土のハンターにしていると聞いている。

そこでロックマンはあることに気付く。アシッドは土と共にいて、シドゥは行動不能。つまり彼の目の前にいるのは・・・

「まさか・・・門矢さん!？」

「ハアアアアアアア!！」

アシッド・エースの攻撃は、シリウスに多大なダメージを与える。不意打ちが予想以上の効果を挙げたのだ。

「スバル・・・今だ!」

ウオーロックの声にハツとし、我に返るロックマン。そして大きく隙の出来たシリウスに対して渾身の一撃を加える。

「・・・チャージッ・・・ショット!！」

一直線にシリウスに向かっていくピンク色の弾丸。それはシリウスの左胸辺りを貫通していく。

「——ッ!?!？」

地面へ崩れ落ちていくシリウス。だがまだ倒せた訳ではない。

「バトルカード！ジェットアタック！」

ロックマンはバトルカードを使って一気にシリウスへ接近していく。アシッド・エースもウイングブレードを発動させ、更にロックオンソードを片手に出現させた。

「ハアアアアア！」

「バトルカード！エドギリブレード！！！」

「ロックオンブレードッ！」

ロックマンはジェットアタックの勢いをそのままにバトルカードでシリウスを斬りつける。アシッド・エースもウイングブレードとロックオンソードの合わせ技でシリウスを貫いた。

真正正銘今度こそシリウスは爆発と共に電波へと還っていく。

「……ふう……慣れないと流石に動きづらいな」

「士……あれだけの功績を残しておきながらよくそんなこと言えますね」

アジット・エースの言葉をアジットは溜め息混じりに反論する。

「やっぱり門矢さんなんですか？」

アジットは彼のことを士と呼んだ。つまりあのアシッド・エースは士ということになる。それに気付いたロックマンはアシッド・エースに話しかける。

「あ？ああ・・・まあ・・・」

アシッド・エースは適当な感じで答える。暁シドウと門矢士はやはり似た者同士だったりした。

「とにかくこいつら連れて一旦戻んそ」

アシッド・エースはそう言いながら適当に二人ほど担ぐと、周波数を変えて現実世界に戻って行く。

「あ！門矢さん！」

ロックマンも慌て残っている人を抱えると、現実世界へアシッド・エースを追っていった。

第27話「復活のアシッド・エース」(後書き)

感想待ってます！

第28話「ブライ再び」（前書き）

どうもネクサス改めギャツビーです！

え？この下り何回目だって……………？さあ……………？

そんなことより今回小説全体で誤字の御指摘を受けたので直しておきました。

アジット↓アシッドです。

第28話「ブライ再び」

―次の日―

ウイルスを発生させていたシリウスをデリートしたこともあり、ウイルスはこれ以上増えることなく事態は確実に沈静化していた。

「はあ・・・こんなもんか？」

自分の・・・と言うよりはシドウの机を一通り整理した後、土はため息をついた。ウイルスのせいでデータがめちゃくちゃになっていたと言うのもあるが、ついでに整理しようと今まであけなかつた引き出しを開けてみるとビックリ。その全てにうまい棒が敷き詰められているではないか。流石の土もこれにはあっけを取られ、ハンターの中ではアシッドが土よりも大きいため息をついていた。

そしてうまい棒を片っ端から片付けた土はこうして一息ついているというわけだが、正直シドウが復帰した後、あれこれ言われると思うとどうも理不尽に思えてしかたがない。

「・・・さてと・・・」

とりあえずノルマは達成したなと思った土は一旦缶コーヒー片手に外の新鮮な空気を吸いにいくことにした。

どうせ吸うなら綺麗な方がいい。そう思った土は木々が生い茂る場所にあるベンチに座る。

「しかしシドウの奴は前からこうだったのか？」

周りに誰がいるわけでもないが疑問系で話始める土。だが誰も答えないわけではない。

「以前星河スバルに会いにコダマ小学校へ行ったときに安いと言ってまとめ買いしたのが始まりですよ・・・」

答えたのはシドウのウィザードで現在は土が預かっているアシッドだ。

「最初がまとめ買いかよ・・・」

二人でほぼ同時にため息をつく。この短期間でどれだけ仲良くなったんだあんたらと思うが、土はユウスケでアシッドはシドウで苦労しているので土にとってシドウとは別の方向で意気投合してしまったのかもしれない。

土はそんな他愛のない話をしている内に缶コーヒーを飲み干すと、茂みの中に投げ捨てようとした後ピタリと止まる。

「・・・・・・・・」

アシッドがジト目で彼のことを見ていたりするからだ。

「・・・・・・・・分かったよ・・・」

アシッドの警告により渋々土は空き缶をベンチにおき直す。

「・・・・・・・・」

さっきの和やかな空気から一転、二人は急に黙り込んでしまう。別に話題が無くなったわけではない。これは・・・

「何のようだ？」

少年が一人こちらに歩いて来る。年はスバルと同じ位だろうか・
・耳にはピアス。銀髪で何処かの民族衣装にも見えなくもない服を来ている。

「・・・・・・・・」

少年は答えない。ただ無言のまま少年と士の殺気が交錯する。

「ソロ・・・・・・・・」

実体化したアシッドが少年の名前を呟く。それと同時にソロの周りを紫色の光が覆ったと思うと、そこには以前戦った電波人間・・
ブライがラプラスソードを右手に持ち立っていた。

「随分物騒だな・・・」

それに対して士は高圧的な態度を崩さずにそう言うと、彼の姿はアシッド・エースへと変わっていた。

別にディケイドがダメなわけではない。だが周波数を変えられるかそうでないかでは、大きな差ができてしまう。クウガとハープ・ノートの模擬試合等がそうだ。あのときは士とユウスケが機転を効かせて勝ったが、今度の相手はハンデを持って勝つのは難しい。そう言うのだ。

「貴様がこの世界に来てから不可解な現象が起き始めている」

「だからどうした？」

ブライの言うことをあつさり受け流すアシッド・エース。おそらく彼の言っていることは本当だろう。だが実際その原因は鳴滝だったりするのだが、彼にその真実にたどり着くことは情報の量的にも不可能である。そして何より鳴滝の居場所が分からない。

アシッド・エースは右手にロックオンソードを出現させるとその刀身を左手の手のひらでなぞる。ディケイドの時ブッカーソードでそうするように。

そして次の瞬間ラプラスソードとロックオンソードの刃が互いを削り合った。ギギギ・・・！！と音をたてると二人は再び距離を取る。

「ガキが・・・お尻ペンペンしてどっちが上か教えてやるぜ？」

「フン・・・ほざいている・・・」

二人はそれを合図に再び剣を交えた。

第28話「プライ再び」（後書き）

感想待ってたりしちゃったりしてるかもしれません。
（↑回りくどい）

第29話「士VSソロ」

WAXA内で警報がなる。だが昨日の様に危機を知らせるものではない。近くにいれば嫌でも目につくぐらい大きなモニターに映し出されるのはブライと戦うアシッド・エース。

「あれは!？」

驚くスバル達の前で画面の中の二人は剣を交える。

「士・・・!!」

同じく別の場所から見ていたユウスケは映像を見るなり急いで外へ向かった。

一方その事件の中心ではアシッド・エースとブライ。二人の刃が火花を散らしている。何度も何度も。

「チツ・・・」

アシッド・エースは軽く舌打ちをする。暁シドウが変身したそれなら絶対に見られない行動だろう。だがこれは士が変身したもの。

「貴様・・・!」

お互いまだ相手に決定的なダメージを与えていない。お互いそれにわだかまりを感じているのだ。

「フッ!」

「ッ!？」

アシッド・エースとブライはほぼ同時に姿を消す。

視点を変えよう。電波世界。現実世界の景色の中に無数のウェーブロードが通っている場所だ。そこに二人はいる。ウェーブロードの上に。ちょうどアシッド・エースの攻撃をブライが避けたところだ。

「……まさか一朝一夕でここまで電波変換を使いこなしているとはな……」

ブライはアシッド・エースの攻撃をかわし、ウェーブロードに着地すると彼を見ながらそう言う。実際自由に電波変換出来るものたちで、こうして瞬時に周波数を変えながら戦えるものは半分にも満たないだろう。

「そいつはどうも!」

アシッド・エースはブライに言葉を適当に返すとアシッドブラスターを彼に向かって連続で放つ。ディケイド風に言うところライドブッカードをソードからガンに切り替えたと言ったところだろう。

「チイ!？」

ブライにはどんな攻撃でも自動で防いでくれる電波障壁と呼ばれる装備がある。だが、それは単発に限るもので一度防ぐとインターバルタイムが必要となる。実際、先程から戦いで電波障壁を使っている場面は少ない。

そして結論を言うと、電波障壁で今放たれた無数の弾丸は防ぐことはできない。そう思ったブライはすぐさま弾丸の軌道上から離れる。不意の遠距離攻撃だったためブライの体制が少し崩れる。

「ハアッ！」

その一瞬を見逃すアシッド・エースではない。彼はすぐさま装備をロックオンソードに変えるとそのままブライへ突っ込んだ。だが彼は失念していた。

「なっ!?!」

彼の剣を受け止めるもの。先程使用しなかった電波障壁だ。アシッド・エースに大きな隙が出来る。立場が逆転した。ブライがそれを見逃すはずもなくラプラスソードの一閃がアシッド・エースの装甲をとらえた。

「ウアアアアッ!?!」

咄嗟に周波数を変えようとしていたのか、攻撃を食らった後、アシッド・エースの周波数が変わり、現実世界に姿を表す。

「クッ・・・」

地面を転がるがすぐに立ち上がるアシッド・エース。胸元の装甲にははつきりと傷痕が残されている。

「ふん・・・」

追ってきたのかブライも周波数を変えて現実世界に姿を表した。

「やっぱ・・・こっちがいいか？」

戦闘の途中だと言うのに電波変換を解いてしまう土。だが腰にはバックルが装着されている。ディケイドライバーだ。

「変身!!」

『K A M E N R I D E・・・D E C A D E!』

電子音と共に現れた9つの残像は土と重なり、装甲を形作る。現れたのは・・・仮面ライダーディケイド。

「・・・こっちの方がしっくり来る・・・ってか？」

ブッカーソード片手にディケイドはそう言う。

第二ラウンドが・・・始まった。

第29話「土VSソロ」（後書き）

…いや…別にアシッド・エースが弱いとかそう言うことではなくて
ですね…

電波障壁がチートだったからこんなことに……！！

第30話「ディケイドvsブライ」

「やっと姿を現したか・・・」

ディケイドの姿を見るなりブライは今まで以上に殺気立つ。とてもではないがスバルと同年代の少年が出す殺気ではない。

そんな孤独に生きるブライを少し見た後、ディケイドは気付いた。

「お前・・・似てるな・・・」

昔の俺に・・・とそこまでは声に出さなかった。それを聞いたブライは少し意味が分からないといった表情をした後、問う。

「何を言っている」

「さあな」

ブライの紫色のバイザーの奥にある瞳・・・あれはまさしくただ孤独にライダーたちを倒し、世界を破壊してきていたころの自分の瞳にそっくりだ。あれほどの目をあんな幼いうちから出来る彼はいったいどれほどの苦痛を味わってきたのだろうか・・・それは本人にしか分からない。

「まあいい・・・フッ！」

心底どうでもいいように切り捨てたブライはラプラスソードでディケイドに切りかかる。ディケイドはそれをブッカーソードで受け止めると、その状態でカードを一枚取り出し、バツクルに読み込ま

せる。

『ATTACK RIDE・・・ILLUSION!』

電子音と共にディケイドが新に二人現れる。

「なにつ!？」

ブライは驚きながらもこの状況では分が悪いことを悟るとすぐさま後ろへ下がろうとする。だが。

『『ATTACK RIDE・・・BLAST!』』

分身して現れたディケイド二人が同時にブラストを発動させ、無数の弾丸がブライに襲い掛かった。

「チイ!？」

この場所から離れるために回避行動をとっているブライにさらに来るこの無数の弾丸を避けるすべはない。普通なら・・・ブライの姿が消える。無数の弾丸は、一瞬前までブライがいた場所をただ通過していく。

周波数を変えたのだ。電波人間同士での戦いでは当たり前でも、ライダーにとってこれほど厄介なことはない。ディケイドでたえるなら常時インビジブルを使いたい放題というところなのだから。

「ったく・・・厄介すぎるんだよ・・・」

三人のディケイドは静かにそれぞれブッカーガンやブッカーソー

ドを構える。見えない敵に向かって・・・だが今は彼一人ではない。

「士、六時の方向！」

「後ろかつ！」

アシッドの声がする。ブッカーソードを構えたディケイドは即座に後ろを振り返る。同時に他のディケイドがブッカーガンでアシッドが支持した場所を正確に打ち抜く。

「何！？」

弾丸の一発目は電波障壁で防ぐ。だが二発目三発目、それからブッカーソードの刃はは防ぐことが出来ずに攻撃をモロに受けてしまう。

「グッアアアアアア！！？」

ブライが勢いよく吹き飛ばされると同時にイリユージョンの効果はきれたのか、ディケイドの分身が消えた。

「ふう・・・」

ディケイド・・・士一人ならおそらくの戦い方は出来なかった。クウガのようなペガサスフォームでは単発なので電波障壁に防がれてしまう。しかしあのレベルでなければ相手の出現する位置を正確に把握するのは難しい。

しかし今の彼には電波の世界を見ることが出来るアシッドがいる。ブライはそれを失念していた。使い古された言葉だが1+1は3に

も4にもなると言うことだ。

「おのれディケイド・・・！」

だがこの状況を見て心底面白くない人間がいた。鳴滝である。彼の計画で、ブライをディケイドへ仕向けたまではよかった。だがブライ一人ではディケイド・・・いやディケイドたちに勝つことは出来なかった。

灰色のオーロラが出現する。とても巨大だ。戦闘しているディケイドとブライが一瞬で気付くことが出来るレベルの。

「あれは・・・！？」

やっと現場に着いたユウスケやスバルも啞然とその岸壁のように巨大なオーロラを見つめる。

「おいおい・・・」

ディケイドもこれほどまで巨大なオーロラは、なかなか見ない。下手すれば自分を追ってJを出現させたオーロラよりも面積が大きいかもしれない。

そしてオーロラの中から現れたのは、クリムゾン・ドラゴン・・・別の世界のMr.キングだ。そして大量のウイルスや怪人たち・・・ついに彼らは本格的に制圧に乗り出した。

第30話「ディケイドvsプライ」（後書き）

邪魔したのはユウスケでもスバルでもなく鳴滝という（笑）

感想待ってます！

第31話「開戦」

「どうやらお預けだな」

ディケイドはブライへと向けていたブッカーソードを敵の大群へと構え直す。

「どういう事だ・・・！」

ブライは近くで見ていた鳴滝を発見すると、忌々しげに呟く。彼は、ディケイドがこの現象を発生させていると言った。ディケイドを倒せば収まると言っていた。

彼とて、その言葉を鵜呑みにしていた訳ではない。現に、ディケイドが現れてから滅びの現象が始まった事実から、可能性の一つとして潰しに來たにすぎない。だがその現象はディケイドに襲いかかっている。

それは、鳴滝の言っていた事とは違う。つまり自分は。

鳴滝に騙されまんまとディケイドを倒すために利用された？

そう理解した瞬間ブライのプライドが大きく傷ついた。この俺が意味の分からないやつに利用されていただと？

「ふざけ・・・るな・・・」

ブライは大きく息を吸い、叫んだ。

「ふざけるなああああああああ！！！」

ブライが爆発した。

ラプラスソードを血が滲む程に握り締め、鳴滝へ向かって一直線に向かっていく。

それでも鳴滝は動かない。怒りに支配されたブライの攻撃は単純で直線的なものへと変わっていた。

ゴウツ！と、赤い光の弾のようなものが上空から放たれ、ブライに直撃する。直線だけで動いていたブライにそれを当てるのは実に簡単だった。

「・・・ツ！？あああ！？」

鳴滝を目の前にしてブライは地面に叩き落とされる。そんなブライを見ながら鳴滝はいい放つ。

「君はもう少し賢いかと思っていたが・・・どうやら買いかぶりだったようだな」

地面に倒れ伏すブライにいった後、ディケイドへと向き直る。

「ディケイド・・・この世界と共に朽ち果てるがいい！」

それだけ言うと鳴滝は灰色のオーロラを出現させ、その中に消えていった。

「アアアアアアアアアアアアアア！！！」

利用された挙げ句にこけにされ、無能扱いされた。その事実に耐えられる筈がない。ブライは怒りを押さえることもせず・・・いや、押さえることなど不可能だろう。

張り裂けるような叫び声と共に、ブライは真っ直ぐ敵のど真中へと突っ込んで行った。

「土！」

その光景を見ていたデイケイドを呼ぶ声がする。声がする方向を向いてみるとそこにはユウスケが。そしてその後ろの方にはスバルがこちらに走ってきていた。

「ユウスケか・・・」

「門矢さん！これは一体・・・？」

漸く追い付いてきたスバルは啞然とした表情で目の前の光景を見る。余裕はない。デイケイドはサテラポリス遊撃隊のメンバーにハントーを繋ぐと直ぐ様言葉を放つ。

「いいかお前ら！敵の数は圧倒的だ！無闇に敵に突っ込んで囲まれることは避ける！遠距離から攻撃できるやつはなるべく距離を取りながら戦え！それからジャック！お前は空中から地上のやつらの援護！いいな！」

そこまで言い終わったデイケイドは一方的に通信を切る。そしてこの場にいるスバルとユウスケには直接話す。

「ユウスケ、お前はあのガキどもをクインティアと一緒に先導してくれ。それからスバル」

士は一息つく。

「俺と一緒にあのクソツタレを叩くぞ」

ディケイドは上空を我が物顔で飛び回るクリムゾン・ドラゴンを見据えながら言う。そして彼の言葉に頷いたユウスケは直ぐ様移動を始め、スバルはゆっくり頷く。スバルはトランスコードを受信。ロックマンへと姿を変えた。

「行けるな、スバル」

「はい！」

「へっ！んなこと聞かなくてもわかんたろ！」

ふん、とディケイドはウォーロックの言葉を軽く流すと、静かにクリムゾン・ドラゴンを見上げる。

「行くぞ！」

「はい！」

二人の視線は真っ直ぐクリムゾン・ドラゴンを射ぬいた。

第31話「開戦」（後書き）

ブライ・・・・哀れww

感想待ってます！

第32話「真のアシッド・エース」(前書き)

宿題に追われながらの更新です

第32話「真のアシッド・エース」

『FINAL ATTACK RIDE・・・DE DE DE
DECADE!』

直後、電子音と共にディケイドは、ブッカーガンをクリムゾン・ドラゴンへ向ける。

そして無数のカードがディケイドとクリムゾン・ドラゴンの間に展開され、彼は一気に引き金を引いた。

ゴウツ！という轟音と共にブッカーガンから放たれた必殺の一撃は、カードを貫通しながらまっすぐクリムゾン・ドラゴンへと向かっていく。

そしてその一撃はクリムゾン・ドラゴンがいる辺りで大きな爆発を起こした。

「ええ!？」

いきなりの事だったので、ロックマンは思わず声をあげてしまう。まさか最初から大技をだして、しかもそれを命中させるとは考えてもみなかった事なのだから。

「・・・チツ・・・」

そんなロックマンを尻目にディケイドは仮面の下で小さく舌打ちをする。

理由は簡単だ。彼が放った攻撃は、クリムゾン・ドラゴンに届く事なく何かに相殺されてしまったのだから。

案の定、クリムゾン・ドラゴンには傷ひとつ見当たらない。だがこちらの存在に気づいたようで、急降下しながらこちらに向かってきた。

「スバルツ！来るぞ！」

「はい！」

ディケイドは向かって右側に、ロックマンは左側に回避行動をとる。その直後、一瞬前まで彼らがいた場所をクリムゾン・ドラゴンが高速で通りすぎる。

そして空中で旋回したあとクリムゾン・ドラゴンは地面に降り立った。

『世界の破壊者よ、この私自らが葬ってやろう！』

「そいつはどうか？俺は全てを破壊する。お前も例外じゃないぜ」

これでいい。奴が地上にいてくれればこっちも戦いやすいし、空中から雑兵に攻撃するジャックの邪魔にならない。

『ふん、若造が。その減らず口を今にも叩けなくしてやろう』

「やってみやがれクソジジイ」

クリムゾン・ドラゴンも彼の安い挑発に乗るほどバカではない。

動く事のない二者のにらみ合いが続く。

そんな中、一番最初に動いたのは他でもないロックマンだった。彼はクリムゾン・ドラゴンがディケイドに氣をとられている隙に、懷まで潜り込んでいた。

「ソードファイター！でやああああ！！」

そしてロックマンはバトルカードで素早くクリムゾン・ドラゴンの体を傷つける。あのクリムゾン・ドラゴンは以前自分が戦ったものとは違い、直接心臓部を攻撃しなくてもダメージは通るらしい。

「ふん！その程度の攻撃がこの私に通用するとも思っていたのか？」

ダメージは通るらしいのだが世の中そこまで甘くはできていなかった。クリムゾン・ドラゴンはお返しと言わんばかりにブライに放たれたものと同じ光弾をロックマンに向けて放つ。

「・・・ッ！？バトルカード、スーパーバリア！」

クリムゾン・ドラゴンからそう離れた位置にはいないロックマンには回避に当てる時間はなかった。故にバリアで攻撃を防ぐ。

ズガアッ！という凄まじい音と共にスーパーバリアはガラスのようには砕け散ってしまう。

通常スーパーバリアは相手の攻撃を五回まで防ぐことができる。しかし一回の攻撃で粉々になってしまった。これはスーパーバリアに不備があった訳ではない。単純に先程の攻撃の威力が高すぎたの

だ。

『ATTACK RIDE・・・BLAST!』

ロツクマンを庇うためか、ディケイドはクリムゾン・ドラゴンめがけて赤色の弾丸を大量に放つ。目に見えるダメージは無かったが、注意をこちらに向けることができた。

「こいよ」

『そんなに先に死にたいなら望み通りにしてやろう!』

クリムゾン・ドラゴンは言葉と共に光弾をディケイドめがけて放つ。ディケイドはそれを後方へ転がり、攻撃を避ける。

同じ光弾を再びディケイドに向かって放つ。それもディケイドはうまくかわし、後ろの着弾点には大きなクレーターが出来上がる。

『中々すばしっこいじゃないか。しかし、これならどうだ?』

言葉と共に放たれたのは無数の光弾。

数が多すぎる。避けることも許されないまま光弾はディケイドの装甲で大きくスパークを上げる。

「グウアアアアアアアアアアアア!!?」

大きく吹き飛ばされるディケイド。10メートル近く吹き飛ばされたディケイドの变身は強制的に解除される。その拍子にハンターもどこかへ飛んでいってしまった。

「門矢さん！」

ロックマンは土の元へ駆け寄ろうとするがクリムゾン・ドラゴンに一蹴りにされてしまう。

『呆気ないな、世界の破壊者よ』

「クソッ・・・！」

今まさに止めを刺さんとするクリムゾン・ドラゴンの頭の辺りに弾丸が直撃する。

『なに・・・！？』

ロックマンからではない。そう思った彼らは弾丸が飛んできた方向を見る。そこには、

「まったく・・・しかっかりしろよ土！」

「シドウ・・・！？」

目を見開く土。そこには、アシッド・エース、暁シドウが立っていた。

第32話「真のアシッド・エース」（後書き）

オーズ最終回でのアंकの心情を描いた短編を書いてみました。ただご覧になっていない方はよかったです。

そんなわけで感想待ってます！

ではっ！

第33話「舞い降りる風の戦士」

「シドウ・・・お前どうして・・・」

ここにいるはずのない人物の登場に、士は珍しく動揺してしまう。しかし動揺するのは当たり前だ。今も病室で寝ている筈の人物が、こんな戦場に突然現れたのだから。

「シドウ、無茶だけはしないでくださいよ」

「しなくていい状況だったらな！」

アシッドの言葉を軽く流したアシッド・エースは、アシッドブラスターを構え、攻撃を開始した。

しかしクリムゾン・ドラゴンには蚊に刺された程度の痛みしかない。因みにこのクリムゾン・ドラゴン、弱点であった、コアのようなものがない。つまり、以前戦ったものより強いのだ。

「駄目か・・・チマチマ攻撃してもきりがなさそうだから、一気にいくぞ！スバル！立てるか？」

シドウの問いにスバルは立ち上がる。彼はまだ少しも諦めてはいない。

「はい！」

『何度やっても無駄だ！この私にはかすり傷一つつけることはできない！』

クリムゾン・ドラゴンは嘲笑うように言うがシドウは気にも止めない。

「やってみないとわからないさ」

そっついながらアシッド・エースは自身の最強の技であるウイングブレードを使うため、背中の羽からジェットのようなものを噴射させ、クリムゾン・ドラゴンへ一直線に向かっていく。

一方で、ロックマンもギャラクシーアドバンスであるジャイアントアックスを両手にクリムゾン・ドラゴンへ向かっていった。

「でりやアアアアア！！」

「はぁアアアアア！！」

アシッド・エースとロックマンの攻撃は、クリムゾン・ドラゴンの巨大な胴体を何の苦もなくとらえる。

大きな爆発音と共に煙が舞い上がる。よほどの衝撃だったのか、士からは彼らも、クリムゾン・ドラゴンすら見えない。

「ウアアアアア！！」

ボツ！と、煙の中から二人の人形のシルエットが飛び出してくるいや、この場合吹き飛ばされるといふ表現の方が正しいのかもしれない。

「スバルツ！シドウ！？」

シルエットの正体はすぐに分かった。だから士は二人の名前を思い切り叫ぶ。

『意気込みは誉めてやるが、實力不足だ。その程度では私は倒せん』

煙の中から現れたのは無傷……とまではいかないものの、微動だにせずその場に居座るクリムゾン・ドラゴン姿だった。

「マジかよ……」

吹っ飛ばされ、地面に転がっていたアシッド・エースはよろよると立ち上がりながら驚愕を隠しきれないでいる。

「シドウ、これ以上はあなたの体が保ちません！電波変換を解いてこの場を離れてください！」

「そうはいかない……皆が頑張ってた……俺だけ病室で寝つころがってるなんてできるかよ……！」

「しかし……！」

アシッドの警告にも耳を傾けずに戦おうとするアシッド・エース。無茶をしているのは誰から見ても明らかだ。

それでも彼は戦うのをやめようとはしない。

また、近くにいるロックマンも度重なる攻撃で、立っているのがやつの状態だ。この三人ではもはや満身創痍といっても過言ではない。

『この世界にいた私はこの程度の奴等に負けたというのか?』

嘲るような声だった。三人は怒りを覚えた。悔しかった。反発しなかった。しかしそれをする余力がない。

その中で、士は立ち上がり、一歩前に出る。シドウたちのおかげで多少回復したというのもあるが、クリムゾン・ドラゴンをこのまま調子づかせるのが癪だった。

『世界の破壊者よ、これ程の実力差を見せられてもまだ戦おうとするか』

クリムゾン・ドラゴンの余裕は崩れない。が、士は静かにディケイドライバーを構えようとしたその瞬間、何かにドライバーを弾かれてしまった。

「な・・・ッ!？」

『悪いが私は完璧主義でね、可能性は僅かなものでも消さない気がすまないのさ』

「クソッ!！」

『今度こそ去らばだ、世界の破壊者よ!』

次の瞬間、近くにいるシドウやスバルたちまで巻き込みかねない数の光弾が彼を襲う。今の彼には避ける術も防ぐ術も持ち合わせてはいない。

今度こそ本当に死ぬかも・・・そう思った瞬間、目の前に見慣れた灰色のオーロラが現れ、その中から人影が一人現れる。

『CYCLONE!』

『HEAT!』

『LUNA!』

『METAL! MAXIMUM DRIVE!』

「『ビッカーファイナリジョン!』」

巨大な盾が、彼らを守った。

第33話「舞い降りる風の戦士」(後書き)

はい！スペシャルゲスト！

フハハハ！彼らの登場を誰が予想していたらうか！

スバル「黙れ駄文作者」

.....

スバル「うちの作者調子乗るとバカになるんです。気にしないでください。感想いつでも待ってますのでよろしくお願いします！」

第34話「それぞれの戦い」(前書き)

戦いが始まった直後の遊撃隊視点です。

第34話「それぞれの戦い」

『いいかお前ら！敵の数は圧倒的だ！無闇に敵に突っ込んで囲まれることは避ける！遠距離から攻撃できるやつはなるべく距離を取りながら戦え！それからジャック！お前は空中から地上の援護！いいな！』

プッン……と、それだけ言われて一方的に通信を切られた。

「ジャック……」

「わかってるよ…確かにアイツのいつてことは間違ってる。態度は気に入らねえけどちゃんとやるさ！」

ディケイドからの指示を受け取った二人は顔を合わせると、ハントーを構え、

「「トランスコード！」」

「ジャック・コーヴァス！」

「クイーン・ヴァルゴ！」

二人は姿を一瞬のうちに変わると、片方は翼を羽ばたかせ大空へ。もう片方は杖を持ち直すと、敵の大群へ水の龍を放った。

「しっかし……何だよこの数……」

ジャック・コーヴァスは翼を羽ばたかせながら呟く。地上よりも

見晴らしのいい空から見ると、その敵の馬鹿げた戦力がよくわかる。しかし弱音ばかりはいても意味はないし、士に小馬鹿にされかねない。

「あれは……ソロと……ミソラ？」

あれほど士に敵に囲まれると言われていた筈が、自分が発見した二人は敵のど真ん中で戦っている。

……戦っていると言うより、ブライが一人で暴れまわっているのをハープ・ノートが止めに入ったと思われる状況だ。というか、ブライの暴れっぷりが凄い。なんなもうア。レンジャーに仲間入りできるんじゃないかってぐらい暴れまくっている。

「何キレてんだ……？アイツ……」

ジャック・コーヴァスはブライに若干引きつつ、様子を伺う。適当に仲間に当たらない場所に紫色の火弾、『ペインヘルフレ임』を放ちながら。

ブライを見ていて分かったことがある。あの量の敵を相手にあの勢いのまま戦い続けたのでは体力が保たない。いつか敵の中に埋もれることとなるだろう。別にブライが勝手に自滅するのは構わない。だが近くには仲間であるハープ・ノートがいる。ブライの自滅に、彼女を巻き込む訳にはいかない。

「つたく……しゃあねえな……」

ジャック・コーヴァスは小さくため息をつく、一気に急降下する。彼の技の一つ、『エアロダイブ』だ。

「はあああああ!!」

地上が一気に近くなってくる。とりあえず逃げ道を作るように、敵を蹴散らす。

「ジャック君!？」

「お前は門矢の話聞いてなかったのか!? 敵に囲まれたら数で押し潰されんぞ!」

ハーブ・ノートは、彼のいきなりの登場に若干驚くが、すぐに言葉返す。

「え…ッ……でもソロ君が……」

「お前、人の心配してる場合か!? アイツは強いからこの程度じゃやられねえよ!」

ジャック・コーヴァスが適当なことを言って、とりあえずハーブ・ノートを納得させようとする。

「でも……」 それでも渋るハーブ・ノートに若干苛立ちを覚えつつも、ジャック・コーヴァスは強引にハーブ・ノートの手を掴むと、一気に空中へ飛び出した。

「わあっ!？」

「しっかり掴まってるよ!」

ジャック・コーヴァスは去り際にチラッと地上を見てみる。あれだけギャーギャー騒いだと言うのに、ブライがそれに気づいている様子はない。彼は本気でずっこけると思った。空中にいるというのに……。

とりあえず大群から少し離れたと思うと、ハープ・ノートをゆっくり地上に下ろしてやる。

「ミソラ！お前は（あなた）状況を判断しろ（しなさい）！！」「」

なぜかハープとハモった。

「えっとお……………」

一人と一体の声色に若干怯えつつハープ・ノートは答える。

「やっぱり…………放っておけなかったっていうか…………」

「だからってなあ…………あれは無茶を通り越して無謀だぞ？ちゃんと考えてから行動しねえと命落とすぞ」

ジャック・コーヴァスの声はいつの間にか低く、説得力があるものに変わっていた。

確かにハープ・ノートはきしゃな少女だ。あんな大勢でこられては、いくらブライが近くにいたとはいえ、生きて帰れる保証はない。

「……………」

流石にハープ・ノートもその事に気づいたのか、黙り込んでしま

った。

「ま、説教はまた今度だ。今は奴らを食い止めるぞ。姉ちゃんやゴン太も何処かで戦ってる」

「うん！」

ハープ・ノートは強く頷く。

「それじゃあ…大掃除の続きといこうぜ！」

ジャック・コーヴァスは再び大空へ舞い上がった。

第34話「それぞれの戦い」(後書き)

ジャックはいい子。

そして苦勞人ww

第35話「それぞれの戦いPrat2」(前書き)

学校が始まったので、更新のスピードが落ちてしまうと思います。

気長に待っていただければ幸いです。

第35話「それぞれの戦いPrat2」

「超変身!!」

小野寺ユウスケ、仮面ライダークウガは赤色の『マイティフォーム』から青色の『ドラゴンフォーム』へと姿を変える。

『ドラゴンフォーム』専用武器、『ドラゴンロッド』を片手に怪人やウィルスの群れへ向かって行った。彼には緑のクウガ、『ペガサスフォーム』という遠距離攻撃が可能な姿を持っている。

しかし今回は『ペガサスフォーム』は使えない。『ペガサスフォーム』の力は制限時間がある上に一対一の戦いにしか向かない。大勢との戦いには向いていないのだ。

「はあっ！」

そういつた理由で遠距離武器を持ち合わせていないクウガDFは次々と『ドラゴンロッド』を使い、敵を蹴散らしていく。しかし多勢に無勢。数に押され、思うように戦えない。

「くそっ!？」

怪人の攻撃がクウガDFの装甲を捉えようした瞬間、突如として飛んできた無数の紫色の炎が周りの怪人やウィルスを巻き込んで彼を助けた。

「……ッ!？」

一瞬何が起きたか分からなかった彼だが、すぐに冷静さを取り戻すと紫色の炎が飛んできた方向を見る。

「ジャック君…だっけ？助かったよ」

後方の上空。そこを見上げた彼が見たのはジャック・コーヴァス。味方の電波人間だ。

「まったく……ここには無茶をするやつしかいないのかねえ……？」

ジャック・コーヴァスは事前にクウガの能力を聞いていた。だからクウガにこの状況に適した遠距離武器が無いのも知っていたため、ハープ・ノートのようにその事をとがめたりはしない。

そして彼が小言のように呟いた言葉は案外間違っていなかったりする。

「背中を預けられる人がいればおもいつきり戦える！」

「へ？」

仮面越しなせいで表情を見ることはできないが、なにやら何かを思いついたように叫ぶクウガDFを見て、ジャック・コーヴァスは一瞬思考が停止する。しかしクウガDFは止まらない。

「超変身！」

掛け声と共にクウガの姿は青色のDFから紫色の『タイタンフォーム』へ変化する。しかもそれだけではない。DFの専用武器、『

ドラゴンロッド』は『タイタンフォーム』の専用武器、『タイタンソード』へと変化していた。

「はあっ！！」

先ほどの戦いとは違い、数で圧してくる怪人達を正面から剣で次々と斬りつけていく。

多少のダメージは一切気にしない。敵の攻撃を無視して一方的に怪人やウィルスの大群を撃破していく。しかしダメージを気にしないといっても流石に限界はある。そこでダメージを最小限に抑えるための後方支援が必要になってくる。

それこそがジャック・コーヴアスその人だ。

「……………」

小野寺ユウスケその人に悪気は無いのは分かる。分かるのだが……

「……………だああああ！！もう、ドチクシヨオオオオオオオ！！！」

やけくそ半分、いや、完全にやけくそ気味に再び紫色の炎、『ペインヘルフレイム』でクウガタイタンフォーム（以下TF）を援護していく。

しかし滅茶苦茶な叫び声とは裏腹に、ジャック・コーヴアスの援護は的確にクウガTFを避け、彼の視界の外にいる敵だけを正確に撃ち抜いていった。

だからこそクウガTFは目の前にいる敵だけを問答無用で倒すと

いう無双状態を作り出すことができています。

「ハアアアアアア！！」

クウガTFの攻撃は確実に敵を減らしていくが、次の瞬間何かが彼の装甲に大きな火花を散らせた。

「があああああ！？」

勢いに負けたクウガTFはなすすべもなく怪人やウイルスの大群から吹き飛ばされていく。

「なっ！？」

それを見たジャック・コーヴァスは急いでクウガTFのもとへ歩み寄る。

「大丈夫かよ！？」

「……………なんとか……………」

装甲の分厚いTFだったからこそどうにかダメージを最小限に抑える事ができたが、他のフォームだったら非常にまずかっただろう。それほどの一撃だ。

「面白いゲームがあるって聞いてきたけど……………なるほど、これは面白そうだね？」

圧倒的な力を持って現れたのは、ニッコリと楽しそうに笑う青年。

その笑みは、間違いなく無邪気なものだった。しかし同時に背筋に寒気がする。全身に鳥肌が立つ。こいつは不味い、逃げると本能が叫ぶ。

「久しぶりだね、クウガ……『君は究極の闇をもたらす存在』、僕と同じ存在にならないのかい？」

白い悪魔は、あくまでも無邪気に笑いかけながら、彼らにそういった。

第35話「それぞれの戦いPrat2」(後書き)

感想待ってたりします！

第36話「二人で一人の、通りすがりの『仮面ライダー』」(前書き)

なんかビミョーな出来になってしまったかも…

第36話「二人で一人の、通りすがりの『仮面ライダー』」

「『ビッカーファイナリユニジョン!』」

ディケイドたちを守った盾、そしてそれを出現させた人影。爆発の衝撃で顔を覆っていた士だが、衝撃がやむとゆっくり目の前の人影を確認する。

「よう!大丈夫か?」

それは士にとって聞き覚えのある声。だが同時にしばらく聞いていなかった声。つまり彼はその正体を知っている。

「ダブル……!?!」

その仮面ライダーの名前を信じられないかのように呟く士。しかし当の本人はというと、仮面に隠れて表情は見えないものの、いつもの調子で話しかける。

「怪我とかないか?そっちのやつも」

『翔太郎、一応彼らは無事だ。それから油断してると負けるよ?』

士がダブルと呼んだ仮面ライダー。確かにダブルなのだが彼が知っている外見と少し違う。というより彼らは世界を移動する力はないはずだ。

「二人は僕が呼んでおいたよ?」

そんな土の疑問を解決するかのように口を挟んだのは、仮面ライダーディエンド。海東大樹だ。

「ま……そういうことだ。ここは俺たちに任しておけ。行くぜフィリップ！」

「ああ！」

二人で一人の仮面ライダー、Wはビッカードをプリズムビッカーから引き抜くと、クリムゾン・ドラゴンへ向ける。

「貴様……何者だ!？」

「二人で一人の仮面ライダー……」W

それから一息ついて、

「『さあ、お前の罪を数えろ!』」

掛け声と共にダブルサイクロンジョーカーエクストリーム（以下CJX）はクリムゾン・ドラゴンへ向かって走っていく。

「……私に刃を向けるというなら来るがいい！返り討ちにしてくれる！」

クリムゾン・ドラゴンからダブルに向かってミサイルのようなものが放たれる。ダブルはそれを横に転がることで回避する。しかしミサイルの数は一発や二発ではない。

《PRIRM! MAXIMUMDRIVE!!》

避けるのはほぼ不可能。そう考えたダブルはビッカーソードの持ち手の辺りにあるボタンを押す。すると電子音と共に剣に緑色の輝きが宿った。

「『プリズムブレイク！』」

そして声と共に剣を勢いよく降り下ろす。

すると無数の斬撃が剣から放たれ、ミサイルを全て破壊していく。だがそれだけにはとどまらず、斬撃はそのままクリムゾン・ドラゴンへと向かっていった。

『ござかしい！』

しかしクリムゾン・ドラゴンに傷を負わせることはできない。ダブルの最強の姿であるCJXでさえこれだ。はたしてやつを倒すことなどできるのはだろうか？しかし泣き言ばかりは言っていられない。

「なぜディケイドに味方する……………」

ダブルCJXの参戦。それをクリムゾン・ドラゴン以上に快く思っていない人物がいた。謎滝……………鳴滝だ。

彼はディケイドライバーを拾い上げている土を見ながら呟く。土は鳴滝の存在に気づくと、意地悪そうな笑みを浮かべた。

「なぜだディケイド！？この世界は破壊すべき世界！なぜこの世界を守るうとする！？」

そんな土の挑発に耐えられなくなったのか、鳴滝は土に向かって叫ぶ。

「破壊すべき世界……？」

だがその問いに、土よりも早く反応した者がいた。スバルだ。なぜこの世界は破壊されなければいけないのだろうか？

「この世界は争いばかりを生んできた。それはこの数年だけではない！約200年前からだ！更にその前にもムー人が自らの手で滅びの道を歩んだ！一体この世界の人間は過去の惨劇から何を学んだと言っただい！？この世界争いしか生まない。そのような世界は必要ない！」

「そいつは違うな！」

鳴滝の言葉を土が遮る。決して大きくはなかったが、戦っているダブルCJXたちにもはつきり聞こえる声だった。

「門矢さん……？」

スバルは少し驚いたような表情をする。シドウよりも、自分よりも、土は早く鳴滝の言葉を否定したのだ。

「確かにこの世界は争いがちよつとばかり多いのかもしれない。でもな、この世界の人間はそれを解決してきた！200年前の争いだってそうだ！この世界には200年前にもロッキーマンがいて仲間がいた！そして彼らが事件を解決に導いた！」

士は更に続ける。

「今この時にもスバルが、ロックマンはいて、シドウたちもいる！
こいつら世界を救った！この世界の人間は争いが起きてもそれを解
決に導く為の力を持っている！………それにな、破壊するべき世界
なんてのは存在しない！！」

「……………ディケイドオ！お前はなんなんだ！？」

聞きなれた問いに士はふっ、と笑いながらディケイドライバーを
腰に装着し、カードを一枚目の前にかざすと、叫ぶ。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！変身！！」

『K A M E N R I D E …… D E C A D E ！』

世界の破壊者ではなく、世界の旅人、仮面ライダーディケイドが
今ここに姿を表した。

第36話「二人で一人の、通りすがりの『仮面ライダー』」(後書き)

感想待ってたりします！

第37話「究極の闇」（前書き）

少し遅れた割にこの短さね……やになっちまうぜ！

第37話「究極の闇」

何が起きたのか分からない。それが現在のジャックの感想だった。ユウスケやミソラ、ゴン太、クインティア。援護に来てくれた遊撃隊のメンバーがことごとくやられていった。

「どうしたの？ わざわざこんなところにまで来たのに…これで終わりなのかい？」

「うるせえよ……！」

もはや電波変換は解けてしまっている。相棒のコーヴァスも満身創痍だ。それでも負けるわけにはいかなかった。

「おれだつてまだ戦えるっ……」

驚異的な回復力で立ち上がったのは、ユウスケだ。目の前にいる白い怪物、『ン・ダグバ・ゼバ』は何者も寄せ付けない強さを誇り、戦いに味方であるはずのウィルスや怪人を巻き込んで顔色一つ変えない。立ち上がる二人を見てそれはにっこりと、とても楽しそうな笑みを浮かべた。

「そつだよ。その調子」

ダグバはそれを見ても余裕の表情を崩さない。…余裕、という表現は少し不適切かもしれない。そもそも彼に戦っているという認識があるかどうかも怪しい。

「変身っ！」

たった数秒でボロボロにされた体にムチをうち、ユウスケはクウガへと再び姿を変えた。

「うーん……ちがうなあ……、そうじゃない。もっと怒りや憎しみを開放しなよ」

「……ッ！」

策もなくクウガは飛び込んでいく。しかしそれはダグバには届かない。見えない何かに吹き飛ばされ、地面を激しく転がった。

「ガ……ッ!？」

どうにか立ち上がるクウガは痛みをこらえながら叫ぶ。

「俺は……二度とあの姿にはならないっ！」

なんとなくわかっていた。目の前に立ちふさがる怪物。それは自分自身の力と似ている、いや、ほぼ同種と言うことを。

「…そうだね、こうしよう。今からその辺りに転がってるのを全部吹き飛ばそうか？」

「なっ……!？」

それに対してダグバから放たれたのは、とてつもなく冷徹な一言。しかし本人からしてみれば地面にある落ち葉をはらうのと同義なのかもしれない。

だがそれはあくまでもダグバでの話であって、それはクウガには当てはまらない。彼にとって、地面に力なく倒れてしまっている彼らは、かけがえのない仲間たち。笑顔を守るべき人たちだ。

「止めろっ!!」

クウガは再びダグバ見向かって走り出す。決して届くはずのない拳を握りしめて。

「君も一緒に吹き飛ばかい？」

ゴウッ!!

次の瞬間、信じられないほどの轟音が辺り一帯を覆った。

地面は抉れ、木は根っこなどないかのように吹き飛ばされ、もはや邪魔だとダグバ自身が一掃していた怪人やウィルスの残骸。実に様々なものが、吹き飛んでいく。

その中には当然、ジャックやミソラなどの遊撃隊のメンバーも含まれていた。

「グッ……ああああああ!!?」

ユウスケ以外に唯一意識のあったジャックの声が彼の耳に届くが、その声はことごとく小さくなり、聞こえなくなった。

「どうして……」

クウガだけが平坦になった地面にたっていた。いや、もう一人。

「どうしてこんなことができるんだ!？」

クウガは絞り出すように叫ぶ。

「……あゝあ、なんにもなくなっちゃったね？」

彼の問いなど聞いてはないなかった。

楽しそうな声が彼の耳に届く。

「あれ、生きてるかな？変身、この世界だと電波変換って言うのかな？まあいいや。生身だとだいぶ危ないをじゃないなあ……?」

「——ッ!？」

血が滲むほど強く握られた拳。誰が見ても明らかに怒りがこもっている。

「お前ええええええ!!」

叫びと共にアークルを両手で覆う。そして右手を斜めにつき出す。変身の時にするポーズだ。

「変身……」

電気のようなものが身体中を駆け巡った。金と黒の禍々しい装甲が形成されていく。

「やればできるじゃないか。出し惜しみは無しだよ？」

ズンツ！と、クウガは一歩前に出る。クウガといっても先程までのマイティフォームではない。『禁断の闇』と比喻される、ライジングアルティメットフォームだ。

それを見てもダグバの表情は変わらない。いや、これから始まるゲームに心底期待しているような笑みだった。

第38話「禁断の闇」

何もなくなつて見晴らしのよくなつた場所にダグバとクウガは対峙していた。遠くにはクリムゾン・ドラゴンの巨体も確認できる。

「……はじめて見るね、その姿」

ダグバはクウガの姿をまじまじと見つめながらつぶやく。

一言で言えば、クウガは黒目だった。真つ黒な複眼に金色のまがまがしい装甲。そして四本の角のようなもの。

「……………」

クウガライジングアルティメットフォーム（以下RUF）。その姿はそう呼ばれている。ひとたび暴走すれば『究極の闇』と呼ばれるアルティメットフォームやダグバよりも危険な存在だ。『禁断の闇』とも比喻されている。

「いろんな平行世界を渡ってきたけど、そのクウガは初めて見るよ」

それを見てすらダグバの余裕は崩れない。いや、彼は心底楽しそうに笑っていた。それはやっと買ってもらったゲームをハードに入れ、電源を入れて起動するのを待っている子供のような表情だ。

そしてどうやらこのダグバは様々な平行世界を渡っているようだ。彼の言うことが正しいなら、彼はこの戦いに関係ないということになる。おそらく戦いと言う名のゲームを求めていくつもの世界をわ

たっていたのだろう。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

叫び声が辺り一帯に響く。それは、小野寺ユウスケのものであつてそうではなかった。唸るような声と共にクウガRUFはダグバに向かつて拳をつき出す。

その瞬間、ダグバが初めて身構えた。

彼の拳を片手で受け止める。これも初めてのことだ。ミシミシと腕が軋み、痛みが走る。それでもダグバは笑っていた。

「凄いね……」

心底楽しそうな声だった。クウガRUFの絶叫するような声とはまるで正反対の声。

「……ッ!!」

クウガRUFは更にダグバへ蹴りを入れる。ダグバはとっさにみぞおちに向かつてくる蹴りから体をそらす、避けきれずに蹴りをくらい、地面を転がってしまう。

「グッ……」

ダグバにダメージが通った。今までの戦いから考えれば信じられないことだろう。

そんな事実を目の当たりにしても表情一つ崩さないクウガRUF

と楽しそうに笑うダグバ。

実に対象的な二人。だがその本質は全く同じものだ。『究極の闇』と『禁断の闇』。この2つの世界を滅ぼしかねない力がぶつかった時、何が起るのか？前例がないためそれは誰にもわからない。

ダグバは何事も無かったように立ち上がる。それを見たクウガRUFは殴りかかるが、ダグバはそれをかわすと、クウガRUFの脇腹に蹴りを当てた。

クウガRUFはそれにより少しよろけるがどうにか踏みとどまると、再び拳をつきだした。ダグバも追撃として放っていた拳と交差し、お互いの頬へ到達する。

その瞬間、お互いの変身が解けてしまう。ダメージ等で強制的に解除されてしまった訳ではない。お互いの『変身』という能力ごと無効化されてしまったのだ。

無効化したのは誰か。それも彼らだ。彼らには相手の能力の一切を無効にしてしまう能力がある。それをお互いが発揮してしまい、結果的に身動きがとれない状況を作り出してしまったのだ。

「フフフツ……楽しいなあ……」

「……………」

相変わらず笑みを浮かべる青年の姿のダグバ。それにたいして無言でダグバを睨み付けるユウスケ。同種でありながら、ここまで正反対だと逆に清々しい。この場に第三者がいたらそんな場違いなことを考えてしまうかもしれない。

「あははははっ！」

立ち上がったダグバは楽しそうに笑いながら、同じく立ち上がったユウスケの顔を殴り付ける。殴られたユウスケは一瞬怯むが、地面を踏みつけこらえると、ダグバを殴り返した。

「……その目。変身が解けても究極の……いや、『禁断の闇』の力は無くなってないんだね」

ダグバの言葉にユウスケは取り合わない。届いているかどうかすらも怪しい。

そんな状況に陥ってもユウスケは戦うのをやめない。今の彼は戦うための殺戮兵器なのだ。

彼の中で様々な感情がぐちゃぐちゃになって押し潰されそうになっていた筈だ。どうしようもなく悔しかった筈だ。憎んだ筈だ。しかし今の彼にはそんな人間らしい感情は何一つない。以前のように操られていた方がまだ良かっただろう。誰かが制御しているのだから。

勿論この状況下の中、そんな都合のいい話はない。ダグバを倒し、力を取り戻せばすぐにでもこの世界を破壊しようとするだろう。

皮肉な話だ。元凶であるダグバが、彼の、ユウスケの『禁断の闇』の力を押さえつけているのだから……

第38話「禁断の闇」(後書き)

……あれ？ロックマンは？

第39話「ファイナルフォームライド……」(前書き)

明日もテスト！

会計と世界史があぶい…

第39話「ファイナルフォームライド……」

ジャックは目を覚ます。視界がぼやけていて上手く焦点が合わないが、青と白が視界に広がっているところを考えると恐らく仰向けに倒れているのだろう。

なぜ？

その疑問と一緒に答えが頭の記憶を呼び起こした。

吹き飛ばされたのだ。どれだけ飛ばされたかは分からないが、生身で助かるような感じではなかった気がする。コーヴァスはデリート寸前の状態なので彼が助けてくれたとは考えにくい。

では、いったいどこの誰が自分を助けたのだろうか？

「これで全員かな？」

誰かの声がした。

「多分な」

全く同じ声が応じた。しかしニュアンスというか、しゃべり方が先ほどの声とは少し違う。

「……………」

首だけ動かして声がする方向を見てみると、人影が2つ。視界がぼやけているのでよくは分らないが恐らく電波人間だと思われる。

「どっちに加勢するんだ？」

「スバル君たちの方かな……正直、アレに勝てるとは思えない」

「……………それもそうか、あんな化け物同士の戦い、近づくのは無謀ってか死亡決定って感じだしな」

「…それじゃあ、いくよ」

「おーけー」

謎の電波人間たちは、それだけ話すとどこかへ向かっていく。

恐らくは、戦っているスバルたちのもとへ。

少し視界のぼやけが無くなってきた。そう思い、ゆっくりと周りを見渡す。すると視線の先には、自分以外にも倒れている人間がいることに気づく。よく見ると、ミソラやクインティアなど先ほどまで共に戦い、あの悪魔に負けてしまった遊撃隊のメンバーだった。

「……………あの二人が、助けってくれたってことか…………」

ジャックは自分の思ったことを思わず口に出してしまっていたが、かされるように小さかった上に聞く人がいないので関係はないのかもしれない。

そして彼の全身から力が抜け、再び意識を手放した。

「行くぞスバル、ここで決着をつけるっ！」

「はいっ！」

ディケイドとロックマンはほぼ同時にクリムゾン・ドラゴンへ向かっていく。策などは特に用意していない。する必要もない。自分の前に立ちふさがるなら容赦なく破壊する。結局、そういうことなのだ。

『何度向かってこようと結果は同じこと！』

クリムゾン・ドラゴンが彼らに向かって火弾を放つが、それを彼らはひらりとかわす。ついでにディケイドはライドブッカーからカード一枚取り出す。

何もなかったブランクのカードに力が宿る。

それを少し眺めていたディケイドは、となりに立っているロックマンに呟いた。

「……、ちょっとくすぐりたいぞ」

「え？」

『FINAL FORM RIDER...RO RO RO ROCK』

MAN!」

拒否権はなかった。

反論の余地もなかった。

ディケイドの両手が容赦なくロックマンの背中を引き裂いた。

「うわわっ!?!」

思わず変な声を上げてしまいがその間にも刻一刻……ではなく声を上げている間に自分の姿が一瞬で変わってしまう。

「これって……」

ロックマンは自分の体を見つめながら呟く。『クウガゴウラム』や『アギトルネイダー』のように姿が形がまるごと変わったわけではない。人形は保っている。

つまりロックマンが驚いているのはそこではないのだ。

「ロックマン……エグゼ……?」

自分が電波変換する『シューティングスターロックマン』とは違う、200年前に活躍したネットナビの『ロックマンエグゼ』。今の姿は、その『ロックマンエグゼ』に酷似していた。

『なに……?』

この光景にはさすがのクリムゾン・ドラゴンも眉をひそめる。

それに、『ロックマンエグゼ』といっても、以前過去に行ってた彼とは細部が多少異なるのだが、今はそれを言及する必要はないだろう。

「これが、俺とお前の力だ」

この場で唯一平然と立っているディケイドはひとこと呟く。それは、非常に心強く、混乱したロックマンの思考を回復させる。

「はいっ……！」

いまだにこの姿、この力のことはよく分からない。だけど、分からないなりに分けることがある。

それは、この力があれば……ディケイドと共に戦えば……クリムゾン・ドラゴンにも負ける気がしないということだけだ。

第39話「ファイナルフォームライド……」（後書き）

ちなみにファイナルフォームライドしたロックマンはクロスフュージョンしたロックマンを連想していただけと分かりやすいと思います。

そんなわけで感想待ってます！

ではっ

第40話「エグゼSSロックマン」(前書き)

更新遅れてしまって申し訳ないです……
相変わらずの駄文ですが40話です！

第40話「エグゼSSロックマン」

「まだまだ、お楽しみはここからだぜ？」

ロックマンの変化。それだけでは足りないのか、ディケイドは更にどこからか自らのカラーリングを模した端末『ケータツチ』を取りだし、カードを一枚差し込む。

起動音が鳴ったのを聞くと更に、画面の上を指でスライドさせていった。

『KUGA / AGIT / RYUKI / FAIZ / BLADE /
HIBIKI / KABUTO / DEN-O / KIVA / DOUBLE
E!』

そして彼の手が画面に触れるたびに次々と鳴っていく電子音。

『FINAL KAMEN RIDE……DECADE!』

次の瞬間、ディケイドの姿がみるみるうちに変わっていく。

そして現れたのが『仮面ライダーディケイドコンプリートフォーム』（以下CF）。彼の、ディケイドの真の姿。世界を渡る仮面ライダーとしての力を存分に発揮することのできる姿だ。

「スバル、翔太郎、フィリップ。いくぞ」

引き金が引かれた。ディケイドCFの手によって。

「ああ、とつとと終わらせてやるぜ！」

『この世界は非常に興味深いものばかりだ。早く片付けてじっくり見て回りたいしね』

ダブルCJXがディケイドCFの隣に立つ。

ファイナルフォームライドをしたロックマン。エグゼSSロックマンも、ディケイドCFの隣に立った。

『ムシケラが……調子に乗るなよおおおおお!!』

次の瞬間、クリムゾン・ドラゴンが叫ぶ。それと同時にミサイルのような攻撃が彼らを襲う。

「フッ！」

ディケイドCFはそのミサイルを正面から叩き斬ると、ミサイルは見事に真っ二つに裂け、あらぬ方向へ飛んでいく。

そしてどこかへ着弾した瞬間、遂に彼らが動いた。

「オラァ！」

ダブルCJXは一気にクリムゾン・ドラゴンの懐へ潜り込むと、ビッカーソードで体を何度も切りつける。

「ハアッ！」

ディケイドCFもブッカーガンを使ってクリムゾン・ドラゴンを牽制していた。そして、

「ソウルユニゾン、サーチソウル！」

エグゼSSロックマンは緑色を基準とした迷彩柄の姿へ変身すると、右手に装備されているスコープガンを放った。

「……クソッ……」

そんな激闘を少し離れている場所から見ている暁シドウは苛立ちを隠せずにいた。見ているものはないのだが問題はそこではない。今彼は、自分自身に嫌気がさしているのだ。仲間が戦っているというのに、自分一人こうして電波変換すらできずにいるということが。

「シドウ……」

その事を察したのか、彼の相棒であるアシッドは言葉を濁す。下手な慰めはいらない。その事を知っているからこそ。

「……………」

シドウはそこであることに気づいた。今ロックマンたちが相手にしているクリムゾン・ドラゴン。あれだけの猛攻を受けていながら傷ひとつない。いくらヤツの装甲が分厚いといっても、いくらならん

でも無傷はおかしい。

「アシッド……」

「わかってます」

何かカラクリがあるかもしれない。そう思った二人はクリムゾン・ドラゴンの分析を開始した。

「デヤア！」

ディケイドCFはクリムゾン・ドラゴンの攻撃を巧みにかわしながらブッカーソードで装甲を斬りつけていく。

「門矢さん！離れて下さい！」

不意に声が聞こえたディケイドCFとダブルCJXは声のした方向を向く。その先には、『カーネルソウル』に姿を変えたエグゼSロックマンがサーベルを真上に振り上げているところだった。

それをみた二人は素早くクリムゾン・ドラゴンから距離をとる。
そして……

「スクリーン……ディバイドッ！」

エグゼSロックマンがサーベルを勢いよく地面に叩きつけると

同時に巨大な衝撃波が地面を削りながらまっすぐクリムゾン・ドラゴンへ向かって行った。

スクリーンディバイドはまるで吸い込まれるかのごとくクリムゾン・ドラゴンへ直撃する。

『ぬるいな』

しかし攻撃をくらったクリムゾン・ドラゴンは相変わらずの無傷。ゲームで例えるならまるでHPが無限のボスと戦っているような錯覚に陥る程だった。

だが、

「これは……」

「受けたダメージを一瞬のうちに回復しているようですね」

「どうやって……」

そこまでアシッドと話していたシドウはあるものをクリムゾン・ドラゴンの近くに発見する。それは亀裂のようにも見える。注意して見なければ見落としてしまいそうなくらいに小さな亀裂。だが、空間をこじ開けているかのような亀裂にシドウは言葉を失ってしまふ。

この場に亀裂の正体を知っている者がいれば絶句していただろう。『ファッサアンビエンス』。次元の裂け目の存在に。

第40話「エグゼSSロックマン」(後書き)

感想待ってます！

第41話「ファッשאnpieンス」(前書き)

自分でもびっくりするぐらいすっからかんです……

自分の文章力のなさに泣きたい…

第41話「ファッサアンビエンス」

「あの亀裂…まさか……」

アシッドの何かに気づいたような呟きにシドウは反応する。

「アシッド、あれ知ってるのか？」

「ええ……しかし仮説の域は出ませんが…『ビョンドード』という存在に覚えがありますか？」

「『ビョンドード』…ってあれか？ 昔出てきた多次元宇宙論のひとつの」

「その通り。そしてその『ビョンドード』、言うなれば向こう側の世界とこの世界を繋ぐ役割をすると考えられているのが、あの亀裂『ファッサアンビエンス』です」

「ちょっとまって！ だけどそんな仮説の域を出ない話であれを片付けるってのか！？ だいいち向こう側の世界なんてものが……」

「士たちの存在が、その証明になりませんか？」

「——ッ！？」

「士たちは平行世界の移動に灰色のオーロラのようなものを用いるもちと言っていました。『ファッサアンビエンス』はその灰色のオーロ

ラと同じような役割をもっています」

「なるほどなあ……で、あの『ファッサアンビエンス』が出現して
る訳は？」

「何かを、『ビヨンド』から供給しているようです。恐らくは、
その供給を断たない限りクリムゾン・ドラゴンにダメージを与える
のは難しいでしょう」

「つまり、ヤツを倒すには一撃で終わらせるか、その『ビヨンド』
からの供給を断ってから戦うかのどっちかって訳か……」

「ええ、前者はほぼ不可能と思われるので、後者が妥当ですね」

「そうと決まれば、どうにかしてあの亀裂を広げて『ビヨンド』
に行つて、補給の大元を叩かないとな」

「それが一番妥当ですかね。ですが……あの亀裂の大きさでは『ビ
ヨンド』に向かうことができません」

「それはしっかり考えてあるさ」

シドウは頭を人差し指でとんとんと叩くと、話を続ける。

「あの亀裂。クリムゾン・ドラゴンの受けるダメージが大きければ
大きいほど亀裂を通つとくるエネルギーは比例する。それに伴つて
亀裂の大きさも変わるはずだ」

「そういうことですか。しかし……今までのことを考えると、相当
の攻撃をしなければ『ファッサアンビエンス』の面積を増やすこと

「ができないかと思われます」

「だったら、こじ開ければいい。だろ？」

アシッドの指摘にシドウははにかみながらそう答える。

「そんな無茶苦茶な……」

「——無茶苦茶なことを現実によつてのけちまうのが、『ヒーロー』
つてもんだろ？」

シドウの大真面目な顔にアシッドは大きくため息をつく。これは
何を言つても無駄だろう。

「士たちにも知らせて協力してもらいましょう」

なかばあきれたような言葉だったがシドウはスルーしているのか
気づいてすらないのか、アシッドの声に反応することはなかった。

『——と、いうわけだ。分かったか？』

シドウの声が、スバルのハンターに響く。戦いながらなのでハン
ターを持ち合わせていないダブルや、ハンターを手放しているディ
ケイドには情報は残念ながら行っていない。

「分かりましたけど……でも——」

『分かったならいい。よし、俺が士たちと一緒に攻撃を叩き込んでやるから、後は頼んだぞ』

（話聞いてないし……）

エグゼSSロックマンは心の中で壮大なため息をつくとき、視界の中にアシッド・エースが現れた。

「シドウ！？お前身体大丈夫なのか！？」

突然現れたアシッド・エースにディケイドはCFは驚きながら駆け寄る。

「大丈夫さ、少しだけならな。それより士、アイツに一回どでかいのかましてくんないか？」

「どう言っことだ？」

アシッド・エースの突然の申し出に怪訝そうな顔をするディケイドCF。だが、何か考えがあるような口ぶりだったので、従うことにしてみる。

「……わかったよ、聞いてただろ？ ぶちかますぞ！」

「へいへい！」

ディケイドCFの問いに答えたのはダブルCJX。それぞれ強大な一撃を放つための準備に取り掛かる。

『CYCLONE!』

『HEAT!』

『LUNA!』

『JOKER! MAXIMUM DRIVE!!』

『BLADE!...KAMEN RIDE...KING!』

『FINAL ATTACK RIDE...B B B BLADE
!』

ダブルCJXはメモリをプリズムビッカーに、デイケイドCFは自らの動きをそのままトレースする召還能力で『仮面ライダーブレイドキングフォーム』を呼び出すと、さらにカードを一枚読み込ませた。アシッド・エースもウイングブレードを放つ準備を整える。

「ハアアアアアアアア!」

「『ビッカーファイナリジョン!』」

4人の雄たけびが重なった瞬間、強烈な輝きと共に何者でも一撃で粉砕してしまいかねない攻撃が、ドラゴンへ一直線に向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7295/>

仮面ライダーディケイド～流星のロックマンの世界～

2011年11月20日11時24分発行